

日常の隣で

水原渉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

久美子と麗奈の物語。

原作の秀一展開がダメだった百合の同志に捧げます。

※Pixivから転載。

※『日常の隣で』2015年5月9日執筆。

※『日常の隣で2』2015年5月14日執筆。

※『日常の隣で3』2015年5月20日執筆。

※『日常の隣で4』2015年5月30日執筆。

目次

4	3	2	1	日常の隣で4	2	1	日常の隣で3	2	1	日常の隣で2	日常の隣で	日常の隣で
86	77	69	59		49	36		26	16			1

日常の隣で 日常の隣で

校門を出てすぐの交差点の左手に、学校の敷地の4倍くらいの森がある。

学校からはもちろん、通学路からも見えるのだが、久美子はその森を意識したことがなかった。

ただの木々の生い茂る空間で、一生踏み込むことのないはずの場所だった。

そこに、枝葉をかき分けながら、麗奈と二人で歩いているこの状況はなんなのだろう。

久美子は、ただ静かに「埋められる」と思った。

部活の後、実に久しぶりに麗奈が話しかけてきて、二人で一緒に帰ろうと言い出した。

断る理由もなかったのでOKすると、学校を出るや否やいきなり久美子の手を引いて、この森の中に足を踏み入れたのだ。

スカートの裾を引っ掛けられないよう気を付けながら、久美子は麗奈の背中に話しかけた。

「ねえ、高坂さん、どこに行くの？」

「別に……」

聞こえないくらい小さくそう呟いてから、麗奈は一度足を止めた。

そして久美子を振り返り、珍しく明るい笑顔を見せる。

「不思議ね。学校からこんなに近くなのに、たった数メートル違う場所を歩くだけで、日常からこんなにも遠ざかれるなんて」

何が楽しいのか、久美子にはわからない。

ただ、笑った麗奈が完璧なまでに綺麗で、ドキドキした。殺されることはなさそうだ。

久美子が何も言わなかったからか、麗奈が小首を傾げた。そんな仕事も可愛らしい。

「久美子は、こういうのは嫌い?」

一瞬の違和感。すぐに、麗奈に名前を呼ばれたと気が付いた。

何かを言う前に、麗奈が言葉を続ける。

「ねえ、二人の時は久美子って呼んでもいい?」

「い、いいけど……」

「じゃあ、久美子も私のこと、麗奈って呼んで。二人の時は」

そう言っただけから、麗奈は久美子の手を取った。

木々は鬱蒼としているが、歩けないほどでもない。

麗奈はどこへ行くつもりなのだろう。そういえばこの森の中に、どこかの山荘のお庭があった気がする。そこへ出ようとしているのか。

いや、きつとこうして日頃は絶対にしないことをするのが目的で、行き先はどこでもいいのだろう。

ただ、どうして自分と?

手を引かれるまま、さらさら揺れる艶のある黒髪を見つめて歩いてみると、不意に麗奈が足を止めた。

少し開けた空間。通学路からの声も音もなく、辺りは静寂に包まれている。

木々の他には何も見えない。頭上の青空は薄暗く、西は赤い。

このまま夜になってしまったら、果たしてこの森から出られるのだろうか。そんなことを考えて、久美子は少し怖くなった。

そんな久美子の不安などお構いなしに、麗奈は久美子と向かい合っただけで立ち、そっと久美子の頬に触れた。

「世界に、私と貴女の二人だけになった気分ね」

そう言っただけで笑った麗奈の瞳が、凍りつくほど冷たくて、久美子はゾッとした。

何か喋らなくてはいけない。

頬と顎を包み込む麗奈の指の感触にドキドキしながら、久美子は視線を落とした。

「麗奈は……どうして北宇治に入ったの?」

「どうして? 嫌だった?」

麗奈が久美子の頬から手を離し、怪訝な顔をする。

適当に切り出した話題だったが、いささかへビーだったかもしれない。久美子は慌てて言い繕った。

「ぜ、全然そういうのじゃなくて！ただ、立華から推薦もらったって、梓から聞いて。ほら、吹奏楽やるなら、うちより全然いいじゃん、立華」

麗奈は真つ直ぐ久美子を見つめている。

久美子は恥ずかしくなつて視線を逸らせた。

「久美子がいたから」

はつきりと、麗奈が答えた。

「……えっ？」

一瞬意味がわからず、驚いて顔を上げると、麗奈は真顔で久美子を見つめていた。

本気なのか冗談なのか、まるでわからない。意味もわからない。

中学時代、最後に言葉を交わしたのはあの会話だったし、友達と呼べるほど親しくもなかった。

入学した後に、貴重な同じ中学校の仲間として久美子を意識するならわからなくもないが、受験の時点で麗奈が久美子を気にしていたとは考えにくい。

「それは、その……笑うところ？」

困つたようにははと乾いた笑みを浮かべてみたが、麗奈は真剣な表情を崩さなかった。

一見ロマンチックにも取れる言葉だが、まったく違う意味なのかもしれない。

久美子の心に緊張が走った。

麗奈が微かに表情を緩める。

「久美子は、高校でもすぐに友達が出来て、楽しそうね」

語調は柔らかいのに、眼差しはまるで射抜くようだ。

その瞳の鋭さに気圧されて、久美子は一步後ずさりして俯いた。

「麗奈も作ればいいじゃない。私には、わざと一人でいるように見えるけど」

言つてから、言いすぎたと反省する。事を荒立てるのが嫌いなくせ

に、つい余計なことを言ってしまう。

「別に要らないわ。本音も言えない、上辺だけの友達なんて」

つつけんどんに麗奈。売り言葉に買い言葉だろうか。

葉月と緑輝のことを言われた気がして、久美子はムツとなった。

勢いで顔を上げると、麗奈は澄ました顔で立っていた。

二人を擁護しようとして、すぐに考え直す。

麗奈は二人のことを言ったのではない。誰に対しても本音を見せない、黄前久美子という人間に対して言ったのだ。

今の麗奈の言葉で二人の顔が浮かんだのは、自分が少なからずあの二人と、上辺だけで付き合っているからだ。

大切な友達だけれど、久美子はあまり本音を語らない。ただそれは、別にあの二人に限った話でもない。

「友達なんて、一人いればそれで十分。私はもう、誰も信じたくない……」

麗奈がため息混じりにそう言った。

久美子が何も言えないでいると、しばらくの沈黙の後、麗奈が懐かしむように口を開いた。

「中学時代は楽しかった。同じ目標に向かって、みんなと一緒に頑張って頑張った。確かに、あんまりみんなと喋ったりはしなかったけど、同じ空間で同じことに励んで、仲間意識はちゃんと持っていたのよ？」

綺麗な笑顔に弾んだ声。久美子はほかんとなった。

久美子には、中学時代、麗奈が楽しんでいるようには見えなかった。

もちろん、音楽は好きだったと思う。しかし、友達や吹奏楽部の仲間と一緒にいることに、麗奈はひどく消極的だった。

「意外って顔してるわね。悔しい思いもしたし、結果は残念だったけど、楽しかったのは本当。あの日の、あの瞬間までは」

「あの日って、最後のコンクール？」

「そうよ。みんながダメ金で喜んでいる中、一人で悔しがっていた私に、とどめを刺すみたいに現実を突き付けてきた子がいてね」

少し斜めに首を傾げ、バカにしたような、挑発的な眼差しで久美子

を見上げる。

——本気で全国行けると思ってたの？

脳裏に焼き付いて離れない言葉。

「あれは、本当に、ごめんなさい」

ずつと言えなかつた言葉が、自然に口をついて出た。

今日麗奈が自分を呼んだ理由。それが、あの一件に決着をつけるためなのは、もはや明白だった。

偶然この話題に行き着いたのではない。麗奈が意図的に導いたのだ。

同時に、麗奈も久美子と同じように、あの一言を引きずっているのがわかった。

本心ではそんなにも自分が悪いとは思っていないけれど、それで場が丸く収まるのなら、プライドなど捨てて謝ろう。

黄前久美子はそういう人間だ。

「ごめんなさい」

もう一度、先ほどよりもしっかりと謝って、頭を下げる。

もやもやした気持ちがないでもないが、それよりもほっとした気持ちの方が大きい。

これでようやく、あの日のあの瞬間にピリオドが打てる。

内心で安堵の息を吐いた久美子に、しかし麗奈は、今の謝罪など聞こえなかつたように続けた。

「別にね、いいの。みんなが、本当は全国なんて目指してなかつたつて。ただ、あの一体感私が勝手に感じていただけで、そんなものはなかつた。一人で仲間意識を持っていたただけだって、はつきりそう言われて、私の楽しかった中学生生活は全部消えてしまった」

気持ちの昂りを抑えるように、麗奈が淡々と吐露する。

「そ、そんな……」

大袈裟な、と言おうとして、うっすらと笑ったのが癪に障ったのか、麗奈が一步詰め寄って大きな声を出した。

「それを、今のごめんなさいで、許されたつもりなの!? そんな自己満足な謝罪なんて要らないわ!」

「麗奈……」

「すごく大切な、もう二度と戻らない中学生生活が、吹奏楽に打ち込んできた日々が、あの一言で全部否定されたのよ？ 全部台無しよ！ 安っぽいごめんなさいで、勝手に終わらせないですよ！」

麗奈が叫ぶ。

日頃冷静な麗奈には珍しい激情。

いや、誤解だ。麗奈は元々、自分よりも遥かに感情豊かな女の子だ。あの日だって、あんなに悔しそうに泣いていたではないか。

強い敵意をぶつけられて、久美子は眩暈がした。3年前にもこんなふうに、部活の先輩に脅かされたことがあった。

怖い。

小さく震える久美子の肩を、麗奈が軽くつかんだ。嘲るように言い放つ。

「だからね、久美子。あの日から私の頭の中は、貴女のことですっぴいな。私が中学生生活を台無しにされたみたいに、貴女の高校生活を台無しにしたい。だから立華を蹴って、貴女の受けた北宇治にした。私は、絶対に貴女を許さない！」

思わず麗奈の目を見たら、久美子がこれまでに見たこともないような冷たい眼差しがそこにあった。

膝の力が抜けて、支え切れずにその場にしゃがみ込む。

どうすればいいのだろう。真っ白が頭で考えを巡らせる。

そんなつもりはなかった。麗奈の人生を否定するなんて、そんな大それたことをしたつもりはない。

けれど、麗奈がそう受け止めて、復讐のために立華を蹴るほど恨んでいるというのなら、ひたすら謝る以外に何ができるのか。

「ご、ごめんなさい。本当にごめんなさい」

しゃがんだついでに、その場に手をついて頭を下げた。

目の前に麗奈のローファーがある。そのまま顔でも蹴られやしないかと、怖くなった。

おかしい。

自分の手を引いてこの森に入った時の麗奈は、確かに楽しそうだった。

た。

それがどうして今、その麗奈に、震えながら土下座して謝っているのだろう。

久美子が蒼白なままうわ言にようにお詫びを繰り返していると、頭上でカシャつと無機質な音がした。スマホの撮影音。

恐る恐る顔を上げると、麗奈のスカートの中が見えて、その向こうにスマホを持った麗奈が不思議そうな顔で久美子を見下ろしている。怯えたまま見上げる久美子の写真をもう一枚撮ってから、麗奈がつまらなそうに言った。

「立って。別に謝ってもらっても、私の時間は戻らない」

ふらふらと立ち上がる。

久美子は麗奈より背が高い。この状況で自分が麗奈を見下ろす構図は良くないと思い、出来る限り項垂れながら、絶望的な声を漏らした。

「私、どうしたらいいですか？」

何をしたらって、麗奈の時間は戻らない。

謝ってダメなら、何をすればいいのか。何をされればいいのか。

久美子が惨憺たる気持ちでいると、麗奈が凍えるような冷笑を浮かべた。

「目を閉じて」

「えっ……?」

「目を閉じて」

強い口調で言われて、思考が停止する。殴られるかもしれない。

目頭が熱くなり、視界がぼやけた。

麗奈がそんな久美子をパシヤツと一枚撮る。

「な、何に使うの……?」

「別に。壁紙にでもしようかしら」

おどけるようにそう言ってから、キツと睨み付ける。

「早く目を閉じなさいよ」

頭がクラクラした。

一度痛い思いをして、それで麗奈が満足なら、もうそれを受け入れ

よう。

戦う勇気もなく、主張する正義もなく、諦めて目を閉じた。涙が零れ落ちる。

心のどこかで、麗奈とは友達になれる気がしていた。

高校に入ってから今日まで、麗奈があの日のことを気にしている素振りは一切なかった。

忘れていたとは思わなかったが、ここまで深刻に受け止めているとは思わなかった。

いや、そういう久美子の安心感が、麗奈を苛立たせたのだろうか。もうわからない。

麗奈が一步近づいてきて、それからふわっと優しく抱きしめられた。

「……え？」

驚いて目を開けると、すぐそこに麗奈の顔があった。

麗奈は久美子の体を左腕で抱き寄せて、髪を撫でるように右手を頭に沿えた。そのまま自分の方に引き寄せて、唇を塞ぐ。

ひんやりとした感触。長い睫毛が、刺さりそうなくらい近くにある。

しばらく、久美子は状況を理解できなかった。

呆然と立ち尽くす久美子から、麗奈は唇を離さない。鼻息が熱い。

両腕を無意識に麗奈の背中に回すと、麗奈が目を閉じたまま言った。

「ごめんね。冗談が過ぎた。ごめんなさい」

「麗奈？」

自分だけ目を開けているのが滑稽で、久美子も目を閉じた。

自分とは違う、ふくよかな胸部の感触が心地良い。そのくせ、強く抱きしめたら折れそうなくらい華奢な体。

甘い女の子の香りは麻薬のように、だんだんと、先ほどまでの恐怖が薄れてきた。

「冗談……なの？」

「冗談よ。ほとんど全部」

唇を強く押し付けられる。

舐めるように這う舌先に、同じように舌を絡めてみる。

もちろん久美子はこれまでに、キスをしたことがない。思っていたよりも液体つぼくて、思っていたよりも全身が熱い。

何がなんだかわからずに、無言で抱きしめ合ってキスをしていると、横でシャッター音がした。

こんな場所で誰かに撮られたのかと思ったら、麗奈だった。

「せっかくだから、記念にと思って」

そう言いながら、もう何枚か撮る。

「さっきの写真は何に使うの？」

「別に。壁紙にでもしようかしら」

唇を離すことなく、麗奈がそう言って笑った。

さっきは学校中にばら撒かれるのではないかと不安になったが、もうそんなことは考えない。

麗奈がスマホをしまって、両手で強く久美子を抱きしめる。

「ん……んっ……」

漏れる吐息が色つぼくて、久美子はだんだん思考が麻痺してきた。

今の声は、麗奈のものだろうか、それとも自分のものだろうか。

粘性を帯びた唾液が、舌を伝って麗奈の口の中に流れていく。こくつと小さく喉が動いて、麗奈がそれを飲み込んだ。

溢れた唾液が顎を濡らす。拭きたいけれど、麗奈がそうさせてくれるとは思えない。

麗奈の背中を撫でると、汗で湿ったシャツの向こうから、火照りが伝わってくる。

とにかく熱い。

「私のこと、嫌いなのか？」

「大好きよ」

「冗談じゃない部分はどこだったの？」

荒い呼吸で尋ねる。

この状況は、麗奈のシナリオ通りなのだろうか。それとも、予想外の展開なのだろうか。

「頭の中が、久美子のことでいっぱいってというのが本当。友達は一人でいい。それ以外は、全部嘘」

少し口や腕が疲れてきた。もう何分こうしているだろう。

「北宇治を受けた理由も、仲間意識があったことも、貴女を恨んでいることも、全部嘘。ごめんね。土下座させるつもりなんてなかったんだけど……」

申し訳なきようにそう言うってから、麗奈はくすつと笑った。

「後で私も土下座しようか？」

「い、いいよ、そんなの」

「不公平じゃない？」

「私、そんな趣味ないからー」

「そう？ 私、想像したらちよつとドキドキした」

おどけるようにそう言うってから、また舌を絡めてくる。

五感の内、視覚だけは封印して、残りのすべてで麗奈を感じる。

むせ返るような女の子の匂い。少し汗の混じった麗奈の味。時々漏れる押し殺した喘ぎ。そして、柔らかくて弾力のある肉体。

「麗奈……」

自分も、この子のことが好きなのだろうか。

確かに実際、あまり話はしていないが、葉月や緑輝よりも近くに感じていた。

それは中学時代からの知り合いだからではない。無理をせず、本音を言える相手なのかもしれない。

それがなぜかはわからないけれど。

「麗奈、少し疲れた……」

「先に離れた方が、後でアイスを奢るのよ？」

「そんなあ……」

舌の付け根が痛くなってくる。キスがこんなにも体力の必要なものだとは思わなかった。

いや、こんなふうに唾液にまみれて15分も20分も続けるフーリストキスなど、マンガでもドラマでも見たことがない。

「はあ、はあ……」

もうしばらく、朦朧としながら唇を重ねていたが、いよいよ息苦しくなつて久美子は顔を背けた。

「久美子の負け……」

そう呟いた麗奈の呼吸も荒い。全力疾走した後のようだ。

きつく抱きしめ合う。べたべたして気持ちの悪い顎を、麗奈の制服の襟に押し当てて拭いた。

うつすらと目を開けると、いつの間にか辺りは真っ暗になつていった。

色を失つた世界。麗奈の温もりと、鼓膜をくすぐる吐息の他に、何もない。

少しだけ抱きしめる腕を緩めて、そつと麗奈の胸に触れてみた。ブラジャーの感触の向こう側に、豊かな弾力を感じる。

「何？」

驚いた声。

「羨ましい……」

「ああ、そう……」

気の向くまま麗奈の胸を揉んで、もう一度背中に手を回した。

すり寄せる頬も汗でしっとりとしている。もう少しさらつとした感触の方が良かったが、全体的にべとべとしてロマンチックさに欠ける。けれど、そんな生々しいのも悪くはない。

「久美子は……怒つてないの？　ちよつと、度が過ぎちやつたけど……」

ようやく呼吸の落ち着いてきた麗奈が、不安げに聞いてくる。

久美子は答えるのも面倒で、無言のまま小さく頷いた。

「そう……。良かった……」

安堵の息を漏らして、それっきり麗奈も何も言わなかった。

もう随分長いことこうしている。最初にキスをしてから、1時間くらい経っているのではないだろうか。

さすがに足も疲れてきたので、地面に置いたバッグの上に腰を下ろした。

隣同士並んで座つて、もたれ合うように頭をつける。

「私の、何がいいの？」

辛うじて月明りで輪郭だけ見える麗奈の太ももに、そつと手を置いてみた。

そのまま指先を這わせるように撫でる。

「性格の悪いところ」

麗奈がくすぐったそうに身をよじった。

「心外なんだけど」

「そう？ 私にはどんなそのひねくれたところを見せてね」

「きつと麗奈は、私じゃない私が好きなんだね」

「私だけが貴女を理解してるわ」

同じように、麗奈が久美子の太ももに手を乗せて、その表面を指でなぞる。

自分がされてみると、なるほどこれはくすぐりたい。

もう一度抱きしめ合ってキスをした。

麗奈がスカートの裾から手を入れて、久美子の下着の熱くなっている部分に指を押し当ててる。

「れ、麗奈ー！」

じゅんつと、湿度が麗奈の指に伝わるのがわかって、久美子は顔を赤くして抗議の声を上げた。

「冗談よ。怒らないで」

謝りながらも、麗奈は指を離さない。

部活の時間も含めて一日中穿いていた上、さつきまでずっと麗奈と官能的なキスをして、この上なく湿って汚い状態の下着が、麗奈の綺麗な指を汚しているかと思うと、恥ずかしくて逃げ出したくなった。

麗奈が指先を動かすたびに、体中が痺れて熱くなる。

「ダ、ダメだよ、麗奈……。恥ずかしい……」

唇を離し、くたつと肩に頭を預ける。

「なに今の。すごく可愛かった。録音するから、もう一回言つて」
「ヤだ……」

麗奈が抱え込むように体を抱き寄せながら、もう片方の手でずつと下着の上から久美子を弄ぶ。

しばらくされるがままになっていたが、思わず熱っぽい声が漏れたので、慌てて麗奈の手を離させた。

「おしまい」

「もうよかったの?」

「私が頼んだんじゃないし!」

「それもそうね」

無言で抱きしめ合ってキスをしてから、もう一度座り直して前方の闇を見つめた。

数メートル先も見えない。二人でスマホの懐中電灯アプリで照らせば、なんとか帰れるだろうか。

「帰る?」 「晩中ここにいろ?」

そういう選択肢もあるのか。

ぼんやりと思う。

「私、お手洗いにいきたい」

「ここにはないわ」

「それは見ればわかるけど」

「そこら辺ですか? 大丈夫。私しか見てないから」

「十分、嫌」

麗奈が可笑しそうに笑った。

思えば、麗奈が笑うところなど、見たことがなかった。今日はよく喋るし、心を開いてくれているのだろうか。

どうして自分なのかは、結局よくわからない。性格が悪いのは認めなくもないが、それを好きだというのが本心とは、とても思えない。

「本当に私のこと、好きなの?」

「好きよ? 何回キスしたら信じてくれる?」

「も、もういいから! そう言えば、最初にキスした時の写メ、ちょうだい」

「いいけど。壁紙にしてね」

「それはちよつと……」

冗談を言いつつ、アドレスを交換して写真をもらう。

すでに薄暗かったが、写真は綺麗に撮れていた。誰が見ても美人の

麗奈とキスをしている自分。久美子は恥ずかしさと誇らしさで赤くなった。

「それで、これからどうするの？ 一晩中ここにいます？」

スマホの灯りに照らし出された麗奈の表情は、そうしたそうだった。

久美子としても、それも面白そうと思わないでもない。ただ、明日も普通に学校があるし、本気でトイレに行きたい。お腹も空いたが、食糧はない。

「ほら、お手洗いに行きたいし……」

「そこら辺ですってば。私もするから」

「お腹も空いたし」

「帰りたいのね？」

非難げに麗奈。久美子は慌てて手を振った。

「帰りたいけど、麗奈と一緒にいたくないっていうんじゃないの！」

「ほんとかしら」

「本当！ じゃあ、またしよう！ 約束するから、今日は帰ろう！」

またするって、何をするのだろう。

自分でもよくわからなかったが、麗奈は久美子の言葉に満足げに頷いた。

それから素早く一度キスをして、立ち上がる。

「わかったわ。じゃあ、頑張って帰りましょう。遭難者の気分ね」

笑いながら、スマホのアプリで森を照らす。

同じようにして、久美子も麗奈の後に続いた。

たった数メートル逸れただけで、日常はこんなにも変わる。

「まだ言っただけだったけど」

はつきりと、麗奈の背中に向かって言った。

「私も麗奈が好きだから」

腕に痛みが走った。枝に引っかかったようだ。

この際、制服が無事ならそれでいい。小さな傷は綺麗に治る。

「ありがとう」

恥ずかしそうな麗奈の声。

木々の向こうに、街灯の明かりが見えてきた。日常までもう後少し。

森を抜けたら、麗奈との関係はどうなってしまうのだろう。

隣に並んで手を握る。

麗奈が驚いた顔をしたが、すぐに綺麗な微笑みを浮かべて頷いた。

森が終わる。

日常に帰る。

それでも、始まった二人の時間は止まらない。

出てきた場所を振り返って、二人で笑った。

手を繋いで歩き出す。

そんな、新しい日常。

— 完 —

日常の隣で2

1

いつもの通学路がキラキラして見えるのは、決して青空のせいだけではない。

学校までだらだら続く坂道も、まるでハイキングのよう。心が軽いと、こんなにも足まで軽くなるのかと、久美子は感動すら覚えた。

考えてみると、自分には喜怒哀楽があまり無い気がする。

他人の顔色ばかり窺って、感情を出来るだけ殺して生きてきた結果、怒ったり悲しんだりしなくなった。

大事なのは自分がどう感じるかではなく、自分の感情が他人にどう影響を及ぼすか。それこそが、黄前久美子という人間の本质である。

そう考えると、泣くほど悔しがったり、それくらい何かに心血を注ぐというのは、尊敬に値する。

中3のあの日の麗奈を思い出して、久美子は微笑んだ。

不用意な一言ですつとわだかまりのあつた関係も、昨夜の一件で解消された。しかも、仲良くなれた。

久美子には親友がない。

もしかしたら、葉月や緑輝は、自分を親友だと思ってくれているかもしれないが、久美子は心のどこかで壁を作っている。それは誰に対してもそうだ。

女とは、右手で握手しながら、左手で殴り合う生き物だ。あの二人はさっぱりした性格なので、そういうことはないと思うが、それでもまだ知り合って間もないし、無難な付き合いを探っている自分を否定できない。

容易に人を信用しないが、独りは寂しい。集団に入っていないと不安になる。黄前久美子はそんな弱くてずるい人間なのだ。

そういう醜い部分を、久美子は上手に隠して生きている。処世術こそ、平凡な久美子が人に誇れる技術だった。

そんな久美子の本質を、麗奈はすべて見抜いている。見抜いた上

で、むしろそういうところが好きだと言ってくれた。

そのこと自体が、麗奈のひねくれた人間性をよく表していると思うが、本当の自分を好きだと言ってもらえたのは嬉しい。

久美子も麗奈が好きだ。

それは、麗奈が好きと言ってくれたからかもしれない。好意の返報性というものだろうか。

いずれにせよ、昨日までそんなこと意識もしていなかったのに、まるで長年の片思いが実ったかのように、久美子の心は弾んでいた。

早く学校に行って麗奈に会いたい。昨日あんなことをした後だが、麗奈は一体どんな顔をするだろう。

照れた麗奈をからかってやりたい気もするし、逆にいじってほしい気持ちもある。

今日からの日常は、昨日までとは別のものになる。良い方に変わる。

そんな確信を胸に、久美子は逸る気持ちで校門をくぐった。

部活の朝練では、時間が取れずに話しかけられなかった。遠目に麗奈の姿を見ただけで、思わず顔が紅潮したが、果たして麗奈はどうだったのだろうか。

目も合わせず、自分を探す素振りすら見せなかったので、久美子は少し寂しく思った。

クラスが違うので日中は会うことが出来ず、放課後、部活の前に麗奈の教室のドアで待ち構える。そして、何食わぬ顔で出てきた麗奈に声をかけた。

「麗奈ー」

恥ずかしいくらい声が弾んでいるのが、自分でわかった。

特に驚いた様子もなく、麗奈は滑らかな動きで顔を上げると、きよとんとして久美子を見た。

「黄前さん？」

「あっ……」

そういえば、名前で呼ぶのは二人の時だけだと言われていた。

久美子としては名前で呼びたかったので、どうしたものか考えてい

ると、麗奈は久美子の横を通って部室の方に歩き始めた。

すぐに隣に並んで、ひそめた声で聞いてみる。

「私、麗奈って呼びたいんだけど、麗奈は名字で呼ばれた方がいい？」

「どっちでも」

「じゃあ、麗奈で。麗奈も、久美子って呼んでね」

そう言ってから、昨日は同じことを麗奈が言ったと思い出して笑った。

麗奈は無表情で久美子を見て、もう一度前を向く。

「楽しそうね」

そっけない口調。久美子の胸に違和感が広がった。

初めは照れているのかと思ったが、今の麗奈はまるで昨日のことを覚えていないかのようだ。一晩寝て忘れてしまったのだろうか。

いや、そんなはずがない。

あるいは、すべて勘違いだったのか。

それもない。昨夜麗奈からもらったキスの写真を、久美子は部屋で30分は眺めていた。物的証拠というやつである。

「もしかして、後悔してるの？ 昨日のこと……」

声に出すと急に不安になって、見る見る心が萎んでいくのがわかった。

朝から、正確には昨夜からずっと、麗奈と話をするのを楽しみにしていた。

それなのに、ようやく迎えたその瞬間に、麗奈のこの態度はなんなのか。

そもそも麗奈からキスしたり告白したりしたのだから、その責任は取ってほしい。

寂しさ半分、怒り半分、唇を尖らせて麗奈を見ると、麗奈は足を止めて複雑な表情を浮かべた。

そして真っ直ぐ久美子の目を見つめて、口を開いて何か言いかける。

しかし、麗奈の綺麗な薄い唇は、言葉を発する前に閉じてしまった。顔を隠すように、久美子に背を向けて歩き始める。

「ちよつと、よくわからないの」

「わからないって何が？」

「いいから。少し一人にして」

静かなトーンだが、有無を言わさぬ強い口調。久美子の心は完全に折れてしまった。

悲しくなつて足を止める。

麗奈が気にして振り向いてくれるかと思つたが、そんなことはなく、とうとう一度も久美子の名前を呼ぶことなく、麗奈は行つてしまった。

3—3。低音部屋で久美子はぼんやりと窓際の席に座っていた。いつも先輩の夏紀がしているように、やる気なく外を眺める。

あすかは他人に興味が無いし、夏紀も同様。卓也と梨子は合奏していて、同級生の二人はそれぞれ自分の楽器の練習をしている。

久美子はスマホを手を取つた。その時に、腕についた薄い切り傷が目に入る。

昨夜森の中で切つたものだ。他にも背中が筋肉痛だったり、舌が痛かったり、昨夜の痕跡が随所に残っている。

そんな傷や痛みすら、久美子は愛おしく感じていた。

周囲から見えないように気を付けながら、スマホで昨夜の写真を開く。

薄暗い森の中。少し眉間にしわを寄せて、情熱的に自分の唇を吸い上げる麗奈。それを陶然として受け入れている自分。

顔が熱くなる。昨夜の情事が脳裏に蘇る。

「麗奈……」

重いため息をついて、思わず頭を抱えると、頭上で心配そうな声がした。

「高坂さん？」

「えっ？」

「高坂さんと何かあったの？」

見上げると、いつからそこにいたのか、葉月が不安げな眼差しで久美子を見下ろしていた。

久美子は慌ててスマホをしまようと、大袈裟に手を振った。

「な、なんにもないよ！ 全然！」

「ほんと？ 久美子、元氣無いから。何かされたなら言っただけ。力になるから！」

そう言っただけだと、葉月はチューバに戻っていった。

久美子は複雑な気持ちで葉月の横顔を見る。

昔のことを話したからか、葉月は麗奈が久美子に対してあまり良く思っていないと考えている。もともと、昨日の一件があるまで、久美子自身、自信がなかったのだから仕方ない。

中3のあの出来事に関わらず、いや、あれがあったからこそ、麗奈は久美子を好きになった。

「そのはずなんだけど……」

麗奈の言っていた「よくわからない」というのは、麗奈自身の感情のことだろう。

やはり勢いであんなことをしてしまったが、冷静になって考えてみると、それほど久美子を好きではなかったのかもしれない。そもそも麗奈が久美子を好きな理由は弱い。

席に戻ってユーフォニアムを手を取った。こういう時は無心で吹き続けるのがいい。

目の前の課題を一つ一つこなしていく。何年も吹いているのに、なかなか上手にならない。

才能がないのか、熱意が足りないのか。きっと両方だろう。

そうして部活を終え、音楽室で片付けをしていると、麗奈が硬い表情で近付いてきた。

「黄前さん、ちょっといい？」

久美子は恨みがましい目で麗奈を見た。話しかけてくれたのは嬉しいが、やはり名前前で呼んではくれなかった。

表情や口調から見ても、いい話とは思えない。

「いいけど……」

沈鬱な気持ちで答える。

ふと葉月と目が合った。心配そうに見つめていたので、大丈夫だと

伝えるように小さく笑って手を振って、久美子は足早に麗奈の後を追った。

広い校内の裏庭のさらに奥。西陽の届かない暗い場所まで来て、ようやく麗奈は足を止めた。

振り返った瞳は暗く、表情からも覇気が感じられない。

ああ、これはダメなパターンだ……。

久美子は眩暈がしたが、一度大きく深呼吸して気持ちを落ち着けた。

今日一日を振り返って、もはや麗奈が昨日のことを後悔しているのは明白だった。であれば、今から麗奈が言う台詞は容易に想像がつく。

自分から好きだと言っておきながら、やっぱりそうでもなかったと訂正するのはどんな気持ちだろう。

それを、麗奈に言わせてはいけない。せめて、負担を軽くしてあげたい。

この先も、気まづくならずにならぬにそれなりの関係を継続するためには、立場を合わせることに。それが久美子の処世術。

「私ね、昨日帰ってから考えたんだけど……」

言葉を探している麗奈より先に口を開く。

視線を落とす。声が震える。本心と違うことを言うのは得意なはずなのに、胸が張り裂けそう。

「私、思ったより、麗奈のこと、好きじゃないかもって……。だから……」

なるべく明るい声でそう言うてから、ちらつと顔を上げて——久美子は絶句した。

先ほどまで無表情だった麗奈が、大きく目を見開いて、青ざめた顔をしていた。

まるで大切な人の交通事故でも目撃したかのように、放心して唇を震わせている。

「だから、昨日のあれは、なかったことに……」

言いながら、久美子はひどく混乱していた。

おかしい。何かおかしい。

麗奈が切り出しやすいように言った言葉で、どうして麗奈はこんなに動揺しているのか。

もしかして、自分は何か、間違えたのか？

いきなり、痛いほど強く肩をつかまれた。

はっとして顔を上げると、麗奈が目には涙を浮かべて、歪んだ顔で久美子を睨み付けていた。久美子なら見せることのない、持ち合わせてもない、激しい怒りの感情。

「あ、あの……」

言いかけた久美子の唇を、麗奈が乱暴に塞いだ。歯が当たって痛みが走る。

「久美子！」

はつきりと強く、麗奈が久美子の名前を呼んだ。

それで久美子は、自分が根本的な誤解をしていたと気が付いた。

麗奈が名前を呼んでくれた。たったそれだけのことで、胸に温かいものが広がっていく。

しかし、安堵している場合ではない。

麗奈が肩をつかんだまま強く体を押して、久美子は思わず体勢を崩した。

「ちよつと待って、麗奈！」

「嫌だ！ 聞きたくない！」

地面に倒れ込んだ久美子に覆いかぶさって、麗奈が顔を近づけてくる。

そして、剥き出しになった久美子の首筋に口を当てると、付け根の部分の思い切り強く噛んだ。

「い、痛い！」

柔らかな肉に、麗奈の歯が深く食い込む。額に脂汗が浮かんだ。暴れる久美子を押さえ付けて、麗奈が引き千切る勢いで犬歯を突き立てる。

肉が裂けて、久美子はたまらずに叫んだ。

「ああつ、痛い！ やめて！ やめて、麗奈！」

傷口から血液が溢れ出るのがわかる。麗奈がそれを飲み込みながら、さらに容赦なく傷口をえぐる。まるで、自分の痕跡を刻むように。いや、きつとそれは喩えではなく、そうなのだろう。

麗奈は久美子を嫌ってなどいなかった。それなのに、久美子が好きではないと言ったから、自棄になった麗奈が久美子を繋ぎ止めようとした。

誤解だ。久美子も麗奈を大好きだ。

そう伝えるより先に、何かのぶつかる大きな音がして、麗奈の体が久美子の隣にどきつと倒れた。

驚いて見ると、葉月が荒い呼吸で、麗奈を睨み付けていた。両手でバッグを握っている。それで殴ったのだ。

「久美子をいじめないで！」

そう怒鳴り付けると、葉月は倒れて首を押さえている久美子の手を取った。

ぐいっと引っ張られる。

立って麗奈を見ると、麗奈は地面に手をついたまま、人形のように生気のない顔をしていた。泣きそうな瞳。血の付着した唇は、力なく開かれて震えている。久美子は絶望を見た。

全部、全部誤解だ！

咄嗟にそう叫べたら、どれだけ楽だろう。しかし、それを言ったら葉月を傷付ける。

一瞬躊躇した際に、葉月は走り出していた。

手を引かれるまま、久美子はその場を離れた。

色々なことが片付いて、ようやく自分の部屋でひと息ついたら、もう後30分で日が変わる時間だった。

あの後、血がなかなか止まらず、結局家に帰ってから病院に行くことになった。

葉月はずっと付き添ってくれて、随分麗奈に対して憤っていた。

それをどうにか鎮めたが、恐らく納得はしていないだろう。一つ禍根を残してしまった。

傷口を縫わずに済んだのは幸いだったが、傷跡は残ると言われた。

親も葉月も暗い顔をしたが、久美子は内心で喜んでいた。

ずっとハンカチで押さえていたので、セーラー服は無事だったが、少しだけ襟に血がついてしまった。

ハンカチの方は血まみれになり、記念に残しておこうかと思ったが、あつさり母親に捨てられた。

スマホを確認したが、麗奈からの連絡はない。

久美子はメールを書こうとして、結局何も浮かばずに止めた。今は文字だけのコミュニケーションを取るべきではない。経験上、メールのやりとりはこじれる。

この空白の時間に、麗奈が良からぬことを考えていなければいいが、明日会って落ち着いて話せばわかってもらえる。

久美子にはそんな自信があった。

ところが、翌日少し早めに登校すると、麗奈は学校を休んでいた。

葉月が随分心配してくれたが、それどころではない。麗奈が学校を休んだ理由はわからないが、もう一日会わずにいたら、関係の修復が難しくなる。

昨日の別れ際を思い返して、麗奈が明るい想像をしているとはとても思えない。久美子のまったく望まない結論を勝手に出して、それを固めてしまうのに、一日は十分な長さだ。

久美子は気がでないまま授業を受けて、その日は部活を早々に切り上げて帰路についた。

家に帰ると、何のシナリオも描かずに麗奈に電話をかけたが、出てはくれなかった。

「色んな勘違いがあつて、本心じゃないことを言いました。話がしたいです」

そんなメールも送ってみたが、やはり返事はなかった。

久美子はベッドに寝転がり、キスの写真を開いた。

あれからまだ2日しか経っていないのに、とても遠いことのように思える。それに、あまりにも現実離れた時間で、物的証拠のほずの写真正さえ、偽物のように思えてきた。

圧倒的な日常。麗奈と二人の時間は、所詮は日常ではなく、その隣

に佇む夢のようなものだったのだろうか。

目頭が熱くなり、涙が零れ落ちた。

麗奈のことを考えると、封じ込めていた喜怒哀楽が戻ってくる。自分が本当の自分らしくあるために、やはり麗奈には傍にいて欲しい。

友達は一人でいいと、麗奈は言った。

その一人に、自分がなりたい。

「麗奈、大好きだよ。大好き……」

うわ言のように繰り返し返し眩きながら、やがて眠りに落ちるまで、久美子はずっとスマホの写真を見つめていた。

翌日、曇天。雨は降らなそうだったが、念のため折り畳み傘をバッグに入れて、久美子は学校に向かった。

麗奈からの連絡は無いままである。どうしたら関係を修復できるのか、もはや久美子にはわからなかった。

今までの人生で、それほど固執するような人間関係は無かつたし、無理をしなくてもある程度の関係は維持できた。

今日、ちゃんと話せばわかってもらえるだろうか。そもそも修復すべき関係とはなんなのか。

思い返せば、麗奈と熱い関係でいたのはあの晩のたったの2時間程度である。考えれば考えるほど、あの2時間が特別だった気がしないでもない。

いいや。久美子は大きく首を振った。

今日こそ絶対に、麗奈とよりを戻す。弱気になってはダメだ。

校門をくぐると、校舎から綺麗なトランペットの音色が聴こえてきた。音でわかる。麗奈だ。

香織先輩には申し訳ないが、北宇治でこの音が出せるのは麗奈しかない。

久美子は拳を握って教室に向かった。

授業中に放課後のプランを考えていると、1時間目が終わった後、麗奈の方から教室にやってきた。

久美子が呆気にとられて、近付いてくる麗奈をぼんやり見つめていると、間に葉月が立ちはだかった。

いけないと思い、久美子はすぐに立ち上がった。葉月に「大丈夫だから」と声をかけて、麗奈に駆け寄る。

そのままの勢いで手を引っつかんで、教室を出た。

「麗奈ー」

麗奈は久美子と目をあわせようとせず、いつも以上の無表情で立っていた。それからふと久美子の首筋に貼ってある大きな絆創膏を見て、ため息をつく。

「ごめんなさい」

「何も謝らなくていいから。放課後にちゃんと話そう！」

麗奈の肩をつかんで、真剣な目で覗き込む。それでも麗奈は目をあわせなかった。

「もう、話すこととか、無いから」

「私はあるから！」

「ごめんなさい」

向こうへ行こうとする麗奈の隣に並んで、久美子は言葉を続けた。

「全部誤解なの。悪いのは私なの。だから、ちゃんと話を聞いて」

「もういいから」

「私が良くないって言ってるのに！　もう、麗奈のわからず屋！」

思わずそう声を荒げたが、麗奈は振り返ることなく自分の教室へ帰っていった。

久美子は唇を尖らせる。

少し腹が立った。それから、こういう感情も久しぶりだと、頬を緩める。

こうなったら、何がなんでも想いを伝えよう。

そこに麗奈の意思は関係ないし、答えも関係ない。麗奈があの日そうしたように、一方的に、情熱的に伝えればいい。

情熱。なんて似合わない言葉だろう。

自分の意思を隠して、意見を押し込めて、波風が立たないように生きることこそすべてだった自分にも、まだこんなにも熱い想いがあったのかと、感動すら覚える。

麗奈が好きだ。

今日、今、顔を見て、触れて、言葉を交わしてはつきりわかった。だから、必ずあの夜からやり直してみせる！

久美子は決意を込めて、力強く頷いた。

部活が終わると、久美子は自分の楽器だけ片付けて部室を飛び出した。

掃除をサボったのがバレると面倒だったが、幸いにも見咎める者はなかった。

校舎を一周駆け回って準備をすると、再び部室に戻る。そして、麗奈が一人で部室を出たのを見て、そつと後をつけた。

麗奈はどことなく浮かぬ顔をしている。顔色は悪くない。昨日の休みは、やはり風邪ではなく、精神的なものだったのかもしれない。校舎を出るところで捕まえた。いきなり腕をつかむと、麗奈が可哀想なくらい驚いて振り返る。

「久美子ー」

咄嗟に出たのが名前だったので、久美子はなんだか安心した。

「ちよつと来て」

有無を言わず、腕を引つ張って校舎に戻る。

廊下の窓から見える校庭では、もうすべての運動部がその活動を終え、グラウンドをならしている。

陽は西の空を赤く染め、夜が始まろうとしている。

校舎の中は人影も少なく、廊下を歩いていてもほとんど誰ともすれ違わない。

麗奈は何も言わずについてくる。一度振り返ると、目があった。あの翌日の放課後と同じ、よくわからない複雑な表情。

そもそも、あの日麗奈がこんな顔をしていたのがいけないのだ。あのせいで話がややこしくなった。

保健室の前で足を止める。電気は消えていて、中に人の気配は無い。

ドアの取っ手をスライドさせてみたが、鍵がかかっている動かなかった。それも事前に確認済みだ。

ポケットから鍵を取り出す。

麗奈が驚いた声を上げた。

「どうしたの、それ」

「どうでもいいじゃない」

つまらなそうに答えて、ドアを開ける。麗奈を押し込めて、もう一度周囲に人がいないのを確認してから、素早く中に入って鍵をかけた。

それから一番奥のベッドに麗奈を座らせて、カーテンを閉める。し

おらしく座っている麗奈の隣に腰を下ろして、久美子は大きく息を吐いた。

職員室から鍵を盗んでくるという、人生で最も大それたことをしたが、おかげでここまで上手くいった。

そつと麗奈の体を抱きしめた。久しぶりの温もりと柔らかさにドキドキする。

黒髪に顔を埋めてくんくん嗅いだ。麗奈の匂いだ。脳が痺れる。

麗奈が静かに背中に手を回して、体をぎゅっと引き寄せてきた。

何も言わずに唇を合わせる。

角度をつけて、激しくむさぼるように唇を吸いながら、二人でベッドに横たわった。麗奈を下にして、久美子は覆いかぶさって体重を預ける。

麗奈の肉感と弾力。苦しそうに麗奈が呻いて、久美子は意地悪するように、わざと強く抱きしめた。

「久美子、苦しい……」

「我慢して」

ずつとキスしていると、あの日と同じようにじつとりと汗ばんでいた。密着した部分が熱い。

他に誰も来ることのない夜の森の中もなかなかだったが、夕方の保健室というシチュエーションもそそられる。

見回りが来るかもしれない。鍵がないことに気が付いて、先生が見に来るかもしれない。

廊下から足音がして、通り過ぎていく。

それにしても、この薄暗いベッドというのはなんて官能的なのだろう。

仰向けでもなおその膨らみを維持している羨ましい胸を、手の平で押し潰すように揉みしだく。

「んん……っ！」

麗奈が熱っぽい息を吐いた。息苦しそうだが、緩めてあげるつもりはない。

舌先を絡めながら、久美子は咎めるように言った。

「大体、麗奈がいけないんだから」

あの日の翌日、麗奈は久美子にそっけなかった。だから久美子は勘違いした。今回のいさかいの発端は、すべて麗奈にある。

「ごめんなさい。距離感がわからなかったの」

「距離感？」

怪訝に思って顔を離す。

すぐ目の前に、上気した麗奈の綺麗な顔がある。どの角度から見ても美人だ。

ファーストキスを写真で残した麗奈の気持ちがあった。今の麗奈は、切り取って保存しておきたい。

久美子がじっと見つめると、麗奈は恥ずかしそうに視線を逸らせた。

「久美子が好きすぎて、どうしていいのかわからなかったの。こんなこと初めてで……」

耳がとろけるような甘い声。いつもの凜とした麗奈とのギャップが可愛すぎて、久美子は全力で抱きしめた。

「く、苦しいってば！」

「私、絶対に麗奈に嫌われたって思ってた！」

「それは悪かったから」

麗奈が久美子を押し返す。

少し体が離れると、麗奈は器用に位置を変えて、二人で横を向いて抱きしめ合った。

「はあ、苦しかった」

「全面的に麗奈が悪いから」

「そうかしら」

あつけらかなと麗奈。いつの間にか、いつもの麗奈に戻っていて、久美子はなんだかほっとした。

どんな麗奈も可愛いが、やはり澄ました顔が一番似合う。

「久美子が変わること言うから、私、加藤さんにバッグで殴られたわ」

「そんなこと言ったら、私の首！ あの後、血が止まらなくて病院まで行って大変だったんだから！」

「ああ、そのことなんだけど……」

急にトーンを落とす。

冗談で言っただけなので、あまり深刻に謝ったりはしないで欲しい。

そんなことを考えていると、麗奈がいたずらっぽい微笑みを浮かべた。

「久美子の血、すごく美味しかった」

「はあ!？」

「私、前世は吸血鬼だったのかもしれない」

麗奈が唇を指でなぞりながら笑った。もはや可愛いという次元を超越している。

麗奈がそつと久美子の絆創膏に触れ、酔っ払いのようにとろんとした目をした。

「私が頼んだら、また飲ませてね」

「嫌だし」

「どうして?」

きよとんとする。わざとやっているのか、いまいち判断がつかない。

「だって、すごく痛かったし」

「痛いのもって、気持ち良くない?」

「全然気持ち良くない!」

笑いながら、もう一度麗奈の体に乗った。

そういえば、このあいだは立っていたので、こうして互いの重さを感じることがなかった。触れ合う太ももがすべすべして気持ちいい。

「どうしたら、こんなに大きくなるの?」

麗奈の首筋に唇を這わせながら、豊満な胸を指先で滑らかに辿る。

「言うほど久美子の胸、小さい?」

麗奈が裾から手を入れる。しつとりと汗ばんだ指先が久美子のお腹をなぞり、そのままブラジャーに触れた。

ぞくつとして身震いをする。

麗奈は構わずに、ブラジャーの上から久美子の胸を撫でた。

「ああ、小さいか……」

麗奈がほうつとため息をつく。

久美子が何も言わないでいると、麗奈はもう片方の手を、同じように背中から服の中に入れてきて、片手で器用にブラジャーのホックを外した。

「麗奈？」

訝る久美子に構わず、麗奈は一気に久美子のセーラー服をまくり上げると、そのまま腕がせて床に放った。

「ちよ、ちよつとー」

慌てて身を起こした久美子を押さえつけて、ブラジャーも剥ぎ取り、上半身裸になった久美子をベッドに横たわらせる。

いつの間にか外は暗くなっていて、光がないのだけが幸いだった。貧相な胸も、くびれの少ないウエストも、見せられたものではない。赤くなって顔を背けると、麗奈がそつと生の胸を撫でながら、吐息を漏らすように囁いた。

「すごく綺麗よ」

不満げに顔を上げると、麗奈もセーラー服の上を脱いでいた。

黒髪がふわりとなびき、白い肌がわずかな光に照らされる。薄桃色のブラジャーが外されると、やはり大きくて、形のいい胸が露わになった。

じっくり見ていたかったが、麗奈はお返しと言わんばかりに久美子にのしかかってきた。

舌を奥まで絡めながら、裸の体を抱きしめ合う。汗の匂いと、火傷をしそうなほどに感じる熱さ。声と一緒に漏れる吐息。こすれ合う肌があまりにも気持ち良くて、久美子は頭がぼーつとしてきた。

思考が緩慢になる。体を押し付け合っていると、胸の先端がじんじんとしてきた。口の中に溜まった唾液を飲み込む。するはずもないのに、麗奈の味を感じた。

「麗奈……麗奈……」

汗ばんだ背中に爪を立ててみた。柔らかくめり込んでいく。

麗奈の歯が自分の首に埋まっていく感触を思い出した。なるほど、

痛いのは気持ちいいのかもしれない。

脚を絡めると、いつの間にかスカートが爪先の向こう側に落ちていた。知らない内に麗奈がホックを外したのだ。

股がむずむずしたので、麗奈の太ももに押し付けてみた。途端に、電気が走ったように体が痺れる。

「気持ちいい……」

無意識に出た言葉が自分の鼓膜を振動させて、久美子は真っ赤になった。ひよつとして、自分は今、エッチなことをしているのではないだろうか。

知識がないのでよくわからない。いけないことをしている気がしてきたが、麗奈も一緒なら大丈夫だと、心を落ち着けた。

麗奈の前では、隠し事はもうしない。自分のすべてをさらけ出しても、きっと麗奈は受け止めてくれる。

麗奈の手が下着の中に滑り込んでくる。指の動きに合わせて水っぽい音がして、久美子は恥ずかしさと気持ち良さとで真っ白になった。

「はあ、はあ……」

二人の吐息が絡み合う。体中が痺れてくる。

子供のように麗奈の体にしがみついた。

熱っぽい声を漏らしているのは、自分なのか、それとも麗奈なのか。もう何もわからない。

「麗奈、麗奈……私、もう……っ……」

あまりの気持ち良さに、意識が飛びそうになる。声が大きくなる。

麗奈に強く抱きしめられて、もう一度舌を絡め合ったところで、久美子の記憶は途切れた。

闇の中で、荒い息がする。

それがだんだんと落ち着いてきて、やがて静かになった。

呼吸を整えて、久美子は隣を見た。

麗奈が俯せでスマホをいじっている。その光で麗奈の顔が白く照らし出される。妬けるほど綺麗な目鼻立ち。

「何してるの？」

体勢を変えて、片手を麗奈の背中に乗せた。汗でじっとり濡れてい

たが、それは自分も同じだった。

シャワーを浴びたいが、麗奈の汗が愛おしい気もする。

「うん。さっきの、途中から録音してたから、ファイル名をどうしようかなって」

さらっとすごいことを言い出した。そういえば、前に森の中でも、録音がどののと言っていた気がする。

意識がなくなる少し前から、麗奈が一言も喋っていなかったのは、そのためか。

呆れながら首を傾げる。

「前の土下座の写真もそうだけど、そういうの、何に使うの？」

「秘密」

「個人で楽しむ範囲で使っただけ」

「当たり前じゃない」

スマホを放り投げて、麗奈はそっと久美子の髪を撫でた。

それが気持ち良くて、しばらく麗奈に身を委ねる。

「私、好きな気持ちはちゃんと伝えるし、嫌な時は嫌だって言うから、久美子ももう、嘘は言わないで」

「うん」

「私、貴女に好きじゃないって言われて、本当に泣きそうだった」

「私もだよ。すぐウキウキして学校に来たら、麗奈すごく冷たいんだもん。絶対に後悔してるんだって、そう思ったの」

久美子もそっと手を伸ばして、麗奈の髪に触れた。

自分のくせ毛と違って、麗奈の髪はさらさらして真っ直ぐだ。撫でているこつちがドキドキする。

「まあいいわ。今回はお互い様にしましょう」

静かに身を寄せ合う。

さつきまでのように、激しく体を重ねるのも幸せだが、こういう落ち着いた時間も精神的に満たされる。

しばらく何も言わずに、互いの体を触り合っこしてから、麗奈が言った。

「それで、これからどうする？ 帰る？ それとも、一晩中ここにいる

？」

久美子は笑った。聞いたことのある台詞だ。

あの時はトイレにも行きたかったし、帰ると言ったが、今日はトイレも水もある。ベッドは気持ちいいし、一晩中ここにいるのも悪くないかもしれない。

「いいよ。麗奈と一緒にいたいって言うなら、ずっとここにいます」

「一緒にいたい」

即答だった。

久美子は思わず胸が熱くなった。誰かに好かれるって、こんなにも嬉しい。

込み上げてきた涙を拭って笑う。

「麗奈、大好き」

「本当？ だったら、今度また噛んでもいい？」

「それは嫌」

学校の保健室。カーテンの向こうには、見慣れた日常が広がっている。

麗奈の美しい曲線が、わずかな光に照らされている。

それがあまりにも幻想的で、久美子はまた一夜の夢のように、朝が来たら失われやしないと怖くなった。

小さな寝息を立てる麗奈の胸の谷間に手を置くと、規則正しい心音が伝わってきた。

確かな温もりを感じながら、久美子も目を閉じる。

日常は、油断をすると、何もかもを飲み込んでいく。

その大きな波に抗うには、流されるだけの自分を変えなくてはいけない。

強くなろう。この温もりを、二度と手放さないために。

一人で頷いてから、麗奈の柔らかな肩に顔を押し当てる。夜が静かに更けていく。

— 完 —

日常の隣で3

1

美味しそうにソフトクリームをねぶっている麗奈に、久美子は思わず見惚れた。

クリームがつかないように髪をかき上げる仕種と、手元から覗かせる白いうなじ。

眩しそうに細める目と、丸く開かれた唇。その唇がソフトクリームの表面に近付き、舌先がちろつとクリームを舐め取る一連の動きは、同性の久美子でもドキドキせずにはいられない。

それに、普段ツンと澄まして大人っぽい麗奈が、ソフトクリームという菓子類を食べる子供っぽい姿のギャップ。これは額に入れて飾っておきたいと、反射的にスマホでパシャッと写真を撮ると、麗奈が唇をクリームで白く汚した顔で久美子を見た。

それをペロりと舐めてから、視線を落とす。いつの間にか、溶けたクリームがコーンを伝って、久美子の手をベタベタにしていた。

久美子が慌てて手を上げると、麗奈がその手を取って自分の顔に引き寄せた。

「写真なんか撮ってるからよ」

呆れたようにそう言いながら、麗奈が久美子の手についたクリームを舐める。すっかり冷たくなっている麗奈の舌が、指の隙間を這うようになぞって、久美子は小さな声を漏らして俯いた。

宇治橋の近くで、観光客向けに売られているソフトクリーム。それを二人で買って、宇治川を眺めながら並んで座って食べている。

久美子が周囲を窺うと、幸か不幸か二人を見ている者はなかった。信号が変わったのか、橋の上から車の音が戻ってくる。

西日が背中から影を長く伸ばす。並んだ二つの影。手元を見ると、麗奈が久美子のソフトクリームにかぶりついていた。

「なっ……っ！」

絶句する。麗奈は久美子の手を離すと、元に戻ってそっぽを向い

た。耳まで赤くなっている。

久美子は自分のソフトクリームの表面を見る。今しがた、ここに麗奈の舌が触れていたかと思うと、急に恥ずかしくなった。

その部分を大きく口を開けて唇ですくい取る。その様子を、いつの間にか麗奈がじつと見つめていて、久美子は目を丸くてもう一度俯いた。

口に広がる甘ったるい味は、二人を包み込む空気のように。クリームと一緒にコーンをかじると、麗奈が口を開いた。

「どうして写真撮ったの？」

「可愛かったから」

「じゃあ、私も撮る」

麗奈がスマホを撮り出して、久美子に向けた。久美子は思わず顔を隠す。

「ほら、手、邪魔だから。自然に食べて」

「無理だよ、そんな……」

何枚か撮られる。元々麗奈は久美子の写真をよく撮るが、久美子は自分が被写体として映えるとはまったく思っていない。

不細工ではないと思うが、地味だ。麗奈のような華やかさも、淑やかさも無い。自然に撮られる写真はいいが、いざカメラを向けられると萎縮してしまう。

「私のくみコレが増えたわ」

「くみコレ？」

「久美子コレクション」

コノ子は何ヲ言ツテルンダロウ。

思わず呆れてカタカナになる。本当に、中学時代を振り返っても、学校での麗奈を見ても考えられないくらい、茶目っ気のある言動。

これが麗奈らしい麗奈なのかはわからないが、恐らく自分にしか見せない姿だと思うと誇らしい。

ソフトクリームも残りふた口。先に食べ終わった麗奈が、肩にもたれかかってきた。

その重さと温もりを感じながら、最後のコーンを食べ終えて、久美

子も麗奈に体重を預けた。

一つに重なった影はすっかり薄くなり、川の向こうから夜がやってくる。

ぎゅつと手を握り合う。久美子の手は、先ほどのクリームでベタベタしたままだが、平然と舐めてきた麗奈が、気にしているとは思えない。

しばらくそのまま、同じ時間を味わうように沈黙して、麗奈が顔を上げて一度左右に目をやった。

人の少ない場所ではないが、今は近くに誰もいない。それを久美子も確認してから、そつと唇を合わせた。

柔らかく触れ合う唇の先っぽ。すぐに舌を絡め合う。

まだ残るクリームの味がした。どこまでも甘くて、全身の力が抜けていく。恍惚とする5秒。

「はあ。オキシトシンが増えた……」

わけのわからないことを呟きながら、麗奈が唇を離す。さらに数秒余韻に浸って、静かにバッグを引き寄せる。

「そろそろ帰ろうか」

「うん……」

手を繋いだまま立ち上がる。そのまま分かれ道のぎりぎりまで、汗ばむ手の温もりを感じ続ける。

家まで持って帰りたくなる衝動を堪えて、久美子は手を離した。

「じゃあ、また明日」

「うん。おやすみ」

小さく手を振って背中を向ける。

2歩歩いて足を止め、一度振り返ると、麗奈もまったく同じことをしていて、二人で赤くなって前を向いた。

生温い風が吹く。じんわりと汗ばむ首筋を一度ハンカチで拭い、久美子は家路を急いだ。

今思えば、中学時代のあの一言は、不用意ではあったが言ってよかった。

少なからず麗奈を傷付けたが、その傷が久美子の印象として残り、

結果として今に繋がっている。

日常は、麗奈と二人でいることが当たり前になってきた。平穏な毎日。ただ、満足しているかというところ、そうでもない。

部活動で忙しい日が続くが、帰宅部の子たちみたいに、帰りにカラオケに寄ったり、シヨツピングをしたり、そんな時間にも憧れる。土日は私服で小旅行なんかもしてみたい。欲は尽きない。

もちろん、麗奈もそれを望んでいるかはわからない。そういう話をする目撃を輝かせるが、麗奈はトランプを愛している。練習時間を削られるのは嫌がりそうだ。

「だからまあ、中学時代からは考えられないくらい、仲良くはなつたかな」

通学路、珍しく一緒になつた秀一が、最近麗奈とどうだと聞いてきた。

特に隠す理由もないので、ここ数日のことを思いつくまま口にする。

もちろん、森でのファーストキスや、保健室での情事については話さない。ケンカしたことには軽く触れたが、前世が吸血鬼とか、わけのわからない話は自分の胸の内だけに仕舞っておいた。

秀一は頭の後ろでバツグを握って、「ふうん」と気のない相槌を打つた。

久美子よりも頭一つ高い。彼の見る世界はどんな景色なのだろう。たまに気になる。

「高坂が笑うとことか、想像もできないな」

「よく笑うよ？ きつと私にだけ心を許してくれてるんだね」

偉そうに胸を張る。しかし、それについては、秀一はさほど羨ましくなさそうだった。

代わりにこんなことを聞いてくる。

「で、お前は高坂のどこがいいんだ？」

「うーん」

妙に絡んでくるなあと思いつつ、わざとらしく腕を組んだ。

通学路の坂道は同じ制服で埋まっている。時々麗奈の姿を探すが、

いつも朝早く登校してトランペットを吹いているから、待ち合わせなければ会うことはない。

「空気、かな。そりゃ、美人だし頭もいいし、そういうところも好きだよ？　自分をすっかり持つてるところとか、私には無いから尊敬する」

うん、と自分に言い聞かせるように頷いた。

「でも、一緒にいて居心地がいいっていうのが一番かな。喋っていて楽しいし、喋らなくても気をつかわないし」

「他人の顔色を窺う天才のお前がなー」

意外そうに秀一。久美子は思わずむっとなるが、否定はできない。自分のことを話すのが苦手。誰かと二人でいると緊張する。喋っているのを聞いているのが楽。自分が何か言うことで、空気が悪くなったらどうしよう。相手が気分を害したら……。

そんなことばかり考えている黄前久美子という人間を、この幼なじみは熟知している。

少し沈黙が下りる。今日は麗奈と何をしようと考えてる。今通った車の色が好みだとか、落ちているタバコの吸い殻にイラツとしながらも、決してそれを拾ったりはしない自分の人間性について思ったり。なんでもない時間。

秀一が言った。

「俺以外にも、気をつかわない相手ができたわけだ」

「何言ってるの？」

半眼で見上げると、秀一はわかりやすくそっぽを向いた。

久美子は首を傾げる。確かに、秀一といると気をつかわない。今も、隣にいるにも関わらず、全然違うことを考えていた。

そんな相手は他にはいない。けれど、秀一はもはや家族のようなものだから、それは当たり前だ。

「秀一は、弟的な？」

「兄じゃねーの？」

「えー。私が妹かー」

露骨に不満を漏らす。久美子は前を向いた。

校門の手前で混雑して、秀一と腕が触れ合った。麗奈とは全然違う熱さを感じる。

秀一が慌てて腕を離す。嫌だからそうしたわけではないと、久美子は知っている。

知っていて、何も気付かないふりをして下駄箱に向かった。

秀一について、一つ放置してある事案がある。

少し前、葉月が秀一に熱を上げていた。思い立ったらまっしぐらな少女が、片想いを胸に秘めて、見ているだけで満足なわけがない。

葉月は秀一に告白して、残念ながら想いは実らなかつた。葉月はいい子だから、秀一は何を考えているのだろうと思ったりしたが、久美子は少なからずほっとした。

それは別に、秀一が好きだからというわけではない。ただ、何かが変わってしまうのが怖かつただけだ。

久美子自身はそう思っているが、葉月は久美子が秀一を好きで、秀一も久美子が好きだと思っている。実際、秀一は「他に好きな人がいる」と言つて断つたらしい。

要するに葉月は、お前らさつきとくつつけと言っている。言葉にはしないが、その方がいっそ諦めがつくのだろう。

しかし、少なくとも久美子にはその気はない。まったくくない。

もちろん、秀一を嫌つてはいない。男子生徒の中では一番好きだろう。居心地が良いのは事実だ。

ただそれは、恋愛感情ではない。ないと思う。久美子は誰かに対してそういう想いを抱いたことがないので、恋愛感情がどういふものかわからないが、少なくとも秀一については、弟くらいにしか思っていない。

果たして逆はどうなのか。

秀一が葉月に言った、他にいる好きな人とは誰なのか。

それについて考えることを、久美子は放置している。面倒くさいと感じる。とにかく、今の関係を変えたくない。

「それって、我が儘なのかなあ……」

久美子は大袈裟に頭を抱えて、重苦しいため息をついた。

昼休み。暑い日が続くが、木陰のベンチは涼しくて気持ちいい。校庭からする無数の声を聞きながら、久美子は紙パックのジュースに差したストローをくわえた。

一口吸って、ストローを離す。声がないので怪訝に思っ隣を見ると、麗奈は無表情でじつと校庭を見つめていた。

今の話を聞いていなかったのかと思っしたが、そうではなかった。麗奈は校庭を見ているのではなく、次に何を言うか考えているのだ。

今朝の秀一の態度が気になって、気軽に相談してしまっしたが、ひよつとしたら重たい話だったかもしれないと、久美子は反省した。

「要するに、塚本は、久美子のことを好きなの？」

「私の自惚れだといんだけど……」

もう一度ため息をつく。麗奈は何も言わない。

久美子は反省してから後悔した。麗奈に「大変ね」と笑われて終わるネタだっただけだが、何やら思いつめた表情をしている。

久美子は、もし葉月が秀一と付き合ったら、何かが変わっってしまうと思っした。それと同じように、麗奈も不安を抱えているのかもしれない。

「大丈夫だよ。私は変わらないよ？」

安心させるように言っしてみる。

しかし、麗奈の表情は険しいままだった。視線を落とし、一度目を閉じて小さく息を吐く。

「別に、そういうのじゃないし」

重たい沈黙がのしかかった。予鈴が鳴って、声もなく立ち上がる。「麗奈、ごめんね。今の話、もし気分が悪かったら忘れて」

力なく映る背中に向かっ言っしてみたが、麗奈は何も答えなかつた。

胸がざらつく。油断した。すぐく安直に大きなミスをしたのだと、ようやく気が付いた。

ただ、そのミスが何か、いまいぢわからない。だから、その時はそれ以上何も修復できず、無言のままそれぞれの教室に戻った。

放課後には麗奈はもういつも通りだっし、秀一とは話をせず過

ごした。

元々、今朝もたまたま一緒になっただけで、秀一との距離は中学の時から変わっていない。まるで今突然起きたかのように話をしたが、前からあったことを改めて言っただけである。

ただ、麗奈にはそうは聞こえなかったのかもしれない。

家に帰って一人になると、色々なことが頭をぐるぐる廻った。宿題をする気分ではなかったので、明日怒られる覚悟を決めてノートを閉じる。

——大丈夫だよ。私は変わらないよ？

あの一言は、言葉足らずだった。麗奈は、「もし秀一と付き合っても、私は変わらないから大丈夫だよ？」と受け止めたかもしれない。もちろん、そういう意味ではない。「秀一と付き合う気なんてないから大丈夫。麗奈との仲は変わらない」と言ったのだが、恐らく麗奈は誤解した。

だが、今さらそれを訂正したら、余計に深読みされるだけだろう。疑心暗鬼に陥ると、なんでも穿った見方をしてしまうものだ。

昨日と今日とで、状況は何も変わっていない。

久美子はそれをもう一度確認した。何も変わっていないのだから、自分と麗奈も何も変わらない。今日と明日も同じはずだ。

ざらざらする不快な気持ちを押し込めて、久美子は自分に言い聞かせるように頷いた。

そんな久美子の思いとは裏腹に、翌日の昼、事件は起きた。

久美子がいつも通り、緑輝と葉月と三人で弁当を食べようとしていたところに、突然麗奈が現れたのだ。弁当を手にして、実に綺麗な笑顔でこう言った。

「久美子、二人で一緒にお弁当食べない？」

場の空気が凍り付くのがわかった。葉月の表情が見る見る険しくなる。

葉月と麗奈の仲は良くない。校舎裏の一件で、葉月に殴られたことを麗奈が恨んでいるということはないし、殴ったことを葉月が後悔していることもない。

ただ、今となつては葉月が思ったような状況ではなかったと葉月自身知っていて、久美子が麗奈と親しくしていることも把握している。しいて言えば、一番の問題は久美子にあるが、三人とも「あれは不運な出来事だった」と、心の中で折り合いをつけている。

その上で、麗奈はなるべく葉月の前で久美子と親しくしないようにしていたし、麗奈が意図的にそうしていることを、久美子も知っていた。

それが、こうしていきなり爆弾を投下してきたのはどういうことだろう。やはり昨日の一件が引つかかっているとしか思えないが、関連が見えない。

緑輝はじつと様子を窺っている。女子校出身なので、こういう空気には慣れているのだろう。久美子自身、吹奏楽部で少なからずこの手のぎすぎす感には慣れているが、当事者になったことは少なかった。「どういうつもり？　これから三人で食べようとしているの、頭のいい高坂さんなら、見てわかるよね？」

葉月が挑発的に吐き捨てる。「頭のいい」なんてわざわざ付けなくてもいいのにと、久美子は思った。

麗奈がにっこりと笑う。

「私は久美子に聞いているの」

蒸し暑い教室が南極にワープしたかのようだ。

もはや説明するまでもなく、久美子はこのいう選択が大嫌いだ。本当にやめてほしい。どちらかを選ぶとは、どちらかを選ばないことだ。八方美人の久美子にできるはずがない。

それを、麗奈は誰よりもよく知っている。それなのにこの仕打ちには、嫌がらせだろうか。それとも、何か深い意図があるのだろうか。葉月と麗奈、二人に笑顔を向けられて、久美子はたじろいだ。「四人で食べよう」がバッドアンサーなのは明白だ。どちらかを選ばなければいけない。

久美子は麗奈が好きだ。家に帰ってからも、四六時中麗奈のことを考えている。スマホの壁紙も麗奈だ。

けれど、葉月も大事な友達である。誤解だったとはいえ、助けに来

てくれたのは嬉しかったし、その後本当に心配して病院まで付き添ってくれたことで、葉月がいかに自分を大事に思ってくれているかわかった。葉月に心を開いていなかった自分を反省もした。

久美子は自分でもわかるほど乾いた笑みを浮かべて、弱々しく答えた。

「麗奈、今日は三人で食べるから、二人で食べるのは明日にしよう。誘ってくれてありがとう」

もちろん、麗奈が納得するはずがない。それはわかっている。

ただ、解のある問いではなかった。どちらが後でフォローしやすいかと考えた時、久美子はより親しい麗奈の方だと思った。

「わかったわ。邪魔をしたわね」

そう言つて、麗奈は背中を向ける。まるで久美子がそう答えるとかつていたかのように、それ以上何も言わずに教室を出ていった。

しばらくの沈黙の後、葉月が不思議そうに久美子を見た。

「高坂さん、今のはどういうつもりなの？」

葉月が思ったよりも冷静で、久美子は安堵の息をついた。

「正直、全然わかんない」

困った顔で苦笑した。

麗奈は天然系ではない。わざとやったのは確かだが、その意図がまったくわからない。

もやもやした思いを抱えたまま、久美子は三人で昼休みを過ごした。

部活を終えると、辺りは薄暗くなっていた。

バッグを肩にかけて、久美子は麗奈に声をかけた。

「麗奈、ちよつといいい？」

麗奈が複雑な表情で久美子を見る。その瞳がなんだかとても頼りなくて、久美子は少し喧嘩腰だった自分の態度を反省した。

意図は相変わらずわからないが、麗奈は麗奈なりに考えて、悩んだ末の行動だったのだろう。

「いいけど」

大人しく麗奈が従う。

なるべく人目につかないよう気をつけながら、いつか二人で掴み合いになった校舎裏に移動した。

「ここに来ると、久美子を噛みたくなるわ」

麗奈がおどけて笑う。場の空気を和らげようとしたのはわかったが、生憎久美子はそういう気分ではなかった。

正面から向かい合って、なるべく感情を押し殺して聞いた。

「麗奈、どういうつもりなの？　せっかく落ち着いてきた日常を、どうしてわざわざかき乱すの？」

声に棘が孕む。冷静に麗奈の意図を問いたですつもりだったが、つい非難してしまったことを、どうか許してほしい。

中学時代の一言も和解した。その後ごたごたしたが、乗り越えるたびに絆は強くなっている。

葉月が秀一に告白したことには驚いたが、関係は前のまま維持された。葉月と麗奈も、仲が悪いなりに折り合いがついていた。

つまりは、二人でイチヤイチヤしながらソフトクリームを食べたあの日と、状況は何も変わっていない。にも関わらず、なぜ今こうして、難しい顔で向かい合っているのか。

麗奈はしばらく何も言わずに俯いていた。力なく垂れ下がる艶のある黒髪。思わず触りたくなるのを堪えて見つめていると、やがて麗奈が意を決したように顔を上げた。

真剣な瞳に久美子が映る。

「久美子一人が平和で満足な日常なんて、私は要らない。それなら私は、何も無い日常の隣で、貴女と特別な時間を過ごしたい」

はつきりと、力強く、いつもの勝気な麗奈の声が浸透する。

久美子のはつとなった。

自分一人が平和で満足な日常。久美子は現状を、そんなふうと考えたことがなかった。

麗奈とはなんでも言い合える仲だと思っていた。自分がほとんど何も我慢していないように、麗奈も致命的な部分では、何も我慢していないと思っていた。

けれど、ひよつとしたら麗奈は何か、今の関係を維持するために無

理をしていたのかもしれない。

呆然とする久美子に一步近づいて、麗奈がふわっと抱きしめる。その温もりが、今は無性に悲しかった。

「久美子、私は貴女が好き。でも、もし貴女が私の愛を勘違いしてるなら……」

そこで言葉を止めて、麗奈は久美子の体を離した。

黒い綺麗な瞳が潤んでいる。それを隠すように背中を向けて、麗奈が言った。

「私は、全部思い出にする覚悟をするから」

振り返ることなく遠ざかる麗奈の背中を、震えながら見送る他にできなかつた。

渴いた口の中に、嫌な味が広がった。

帰り道の記憶がない。

くらくらする頭でどうにか家まで辿り着き、食事やら風呂やらを済ませて、久美子はベッドに倒れ込んだ。

学校から今まで堪えていた涙が、一気に溢れ出す。

——久美子一人が平和で満足な日常なんて、私は要らない。

麗奈の言葉が、頭の中で何度も何度も繰り返される。

当たり前に存在する日常は、みんなの努力によって作られているのだと気が付いた。

葉月は自分が殴った麗奈と仲良くしている久美子に、優しく接してくれる。

好意を放置しながら、生殺し状態を甘んじて受け入れてくれる幼なじみ。

自分の「変わりたくない」という我が儘に、みんなが付き合ってくれている。

そんな自分勝手な日常を、麗奈が見限るのも無理はない。

だけど、麗奈に対しては、何を改善すればいいのかわからない。麗奈は何を我慢しているのだろう。

まさか今日の昼、あそこで麗奈と一緒にご飯を食べれば良かったのか？

それは違う。麗奈はそういう子ではない。そもそも、麗奈にあいう行動をさせてしまった、自分のそれまでの言動がまずかったのだ。積み積みもっていったものがあつたとしても、きつかけとなったのは秀一の会話で間違いない。

生殺しになつている秀一に同情したのだろうか。秀一の好意にではなく、久美子自身の煮え切らない態度に苛立ったのかもしれない。

秀一との関係に白黒つけなければいいのだろうか。

いや、麗奈がそんなことを望んでいるとはとても思えない。きつとそういう表面的な話ではないのだ。

何か見落としている。

けれど、その何かがまったくわからない。

聞きたい。今すぐ電話して確認したいが、それに気付けない自分に失望されるのが怖い。

麗奈に嫌われたくない。離れたくない。自分にだけ見せてくれるあの笑顔を、絶対に手放したくない。

麗奈と過ごした時間が、触れ合った温もりが、交わした言葉が、全部思い出になるなんて、そんなのは堪えられない。

「嫌だ……嫌だよ、麗奈……」

枕に顔を埋めて、嗚咽を漏らす。どうにかしないといけないが、何も浮かばない。

単なる麗奈の我が儘ではないかと思う気持ちもある。けれど、たとえそうだったとしても、何か応えなければ壊れてしまう。

今日の麗奈はひどく思いつめていた。あの子も今頃部屋で泣いているかもしれない。

一緒にいたい。

それを誠実に伝える他に、もう何も思い付かない。

翌日、恨みがましいほどの快晴。久美子はどんよりした気分で登校した。

部活の朝練に参加すると、麗奈はいつもの無表情でトランプペットを吹いていた。近付いて「おはよう」と声をかけると、麗奈も「おはよう」と返してきた。

それがあまりにもいつも通りだったから、久美子は安心して言った。

「今日のお昼、一緒に食べようね」

「あー、それなんだけど、やっぱり今日はいいわ」

そっけなくそう言われて、弾みかけていた気持ちが一気に萎んだ。

麗奈は久美子を見ずに、じつと譜面と睨めっこしている。

「どうして？」

どうにかそれだけ声を絞り出す。

「どうしても」

「話したいことがあるんだけど」

「昨日のこと？」

ちらつと、麗奈が顔を上げる。感情の読み取れない瞳。久美子は大きく頷いた。

「うん。だから、お昼に……」

「それなら、帰りに私から声をかけるわ」

強めの語調で言い切って、麗奈はもう話すことはないと言わんばかりに、譜面に目を戻した。

朝から考えてきたたくさんのシナリオの、どれにも該当しない麗奈の反応。

久美子は思わず眩暈がして、何も言わずにその場を離れた。

お昼は結局、同じクラスの三人で食べた。もちろん、葉月には突っ込まれたが、久美子は笑って誤魔化した。

「じゃあ昨日のは、私への当てつけだったのかなあ」

葉月が釈然としない顔をする。久美子は慌てて首を振った。

「ただの私への嫌がらせだよ。ちよつとケンカしちやつて」

これ以上こじれて欲しくない。麗奈のことだけで手いっぱいなので、全面的に自分のせいにして葉月を抑える。

授業はすべて右から左へ抜けていく。こんなことでは、次の試験は半分より下になるかもしれない。

部活にも身が入らない。葉月と緑輝が心配してくれて、久美子は空元気で振る舞った。

自分が落ち込むと、また麗奈への風当たりが強くなる。麗奈はわざわざみんなに嫌われたくて、それを狙っているのではないかとさえ思えてきた。

部活の時間をやり過ぎとして、音楽室の隅で佇む。このまま麗奈に声をかけてもらえなかったらどうしようと思っただが、杞憂に終わった。

「お待たせ、久美子。帰ろう」

麗奈は笑顔だった。今まで他人の顔色ばかりを窺って生きてきた顔色マスターの久美子が見ても、晴れやかな笑顔。

それでも、どうしても何か目論んでいるとしか思えない。疑心暗鬼に陥ると、なんでも穿った見方をしてしまうのだと、前に自分で思った通り。

下駄箱で靴を履き替えて外に出る。

「ねえ、手を繋いでいい？」

不意に麗奈がそう言っつて、久美子が答える前に手を握った。温かい。

麗奈の温もりに触れると、思わず胸が熱くなった。わけのわからない涙が込み上げてきて、慌てて上を向く。

眩しい星だけが小さく輝く空。

「昨日は、意地悪なことをしてごめんなさい」

いきなりそう言われて、久美子は驚いて麗奈を見た。

麗奈も同じように久美子を見る。足を止めて見つめあって、久美子は恥ずかしくなって俯いた。

「私も、ごめんなさい」

「何が？」

「わかんないけど」

もう一度歩き始めて、少ししてから麗奈が言った。

「わからないなら謝らないで。とにかく謝っておけば丸く収まるって考えるの、久美子の悪いクセよ」

辛辣な言葉。泣きそうな心地で隣を見ると、麗奈は楽しそうに微笑んでいた。

久美子はほっとした。

麗奈は一度バッグの中身を確認するように振り返り、何も取り出さずに歩き出した。

「私、麗奈のこと、わからない」

「何それ。むしろわかった気になってたの?」

「……今日の麗奈は意地悪だね」

ふてくされると、麗奈が声を出して笑った。機嫌は良さそうだ。

一緒に電車に乗る。かなり引つついて隣同士に座ると、触れ合う腕がひんやりして気持ち良かった。

麗奈は時々首を捻っている。こんなに落ち着きがない麗奈を見るのは初めてだ。

「どうかしたの?」

「別に。私も色々考えてるのよ」

「そうだね。私も。今日は仲直りしようね」

ぎゅっと強く手を握る。

「元々ケンカなんてしてないし」

同じように握り返して、麗奈がそっぽを向く。いつも通りの、素直じゃない可愛い友達。

しかし、何故か違和感が拭えない。昨日あんなに重たい台詞を残した割に、今の麗奈は軽すぎる。

宇治駅で降りていつもの交差点を渡る。改札口で離れたきり、そのままになっていた手を、麗奈が再び握った。

「ごっち。もうちよつと一緒にいよう」

赤くなりながら手を引っ張る。久美子に拒否権はなかったし、異存もなかった。

宇治橋は渡らずに、さわらびの道の方へ続く細い川沿いの道を歩く。宇治神社にでも行くのかと思ったら、麗奈はその手前の適当な川べりに座った。

暗くて静かだった。時々後ろの遊歩道を歩いて行く人がいるが、あまり気にならない。

手を繋いだままもたれ合う。久美子の大好きな時間。

しばらくそうしてから、ふと顔を上げる。黙ってキスするいつものパターン。

大丈夫かなと心配したが、麗奈はいつも通りに応えてくれた。

互いを確かめ合うように唇を重ねる。腕を背中に回して、体をそっと抱き寄せる。

しばらくむさぼり合うように唇を吸い合った。何人か背後を通り過ぎていく気配があったが、この際知り合いに見られなければいい。

随分大胆になったものだ。それよりも今は、麗奈が愛おしい。

目を閉じてキスが続けていると、不意に麗奈が久美子の胸に手を当てた。そのまま、久美子のなかなか膨らんでくれない胸を撫でる。

久美子も同じように麗奈の胸に触れた。羨ましい膨らみは、相変わらず柔らかい。

「私、久美子のおっぱい、好きよ?」

「嘘だ」

「ほんと」

「私は好きだよ?」

「知ってる」

麗奈がくすつと笑う。日頃麗奈の胸ばかり見ていることに、どうやら気付かれているらしい。

麗奈の指が気持ち良い。大きさは違えど、基本的な構造は同じなので、麗奈も同じように感じてくれているのだろうか。そう思うと、感覚を共有しているような、不思議な気分になる。

一度唇を離すと、熱い吐息が顔にかかった。うっとりとした目で見つめ合う。

麗奈がそつと久美子の頬に触れ、親指で唇をなぞった。

久美子は反射的にその指を口に含み、舌で転がした。

「くすぐったい」

麗奈の声を無視して、根元までくわえ込む。少ししょっぱくて美味しい。

口が寂しくなったのか、麗奈が久美子の髪に顔を押し当てる。

「いい匂い」

嘘だと思っただが、指をくわえているので何も言わない。

自分は麗奈の髪をよく嗅ぐくせに、自分がされると妙に恥ずかしい。久美子はいつだって自分には自信がない。

麗奈が指を引き抜いて、もう一度唇を合わせた。そのまま久美子の太ももに手を置いて、スカートの中に滑り込ませる。

「ちよ、ちよつと、麗奈……」

「まあまあ」

「まあまあじゃなくて!」

赤くなりながら、小声で咎める。確かに後ろから見える位置ではないし、島からはもちろん見えはしないだろうが、すぐ後ろを人が通っていく場所で、いくらなんでも大胆すぎる。

困惑する久美子に構わず、麗奈の手が下着に触れた。自分でわかるほど熱くなっている。久美子は真っ赤になって麗奈にしがみついた。

「麗奈のバカ。バカ……」

「どうしようもなく可愛いわね」

意地悪な声。きつと笑いながら自分を見ているのだろうが、俯いたまま顔を上げる勇氣はなかった。

下着の上から、麗奈が久美子の柔らかな場所に指を這わせる。保健室での一夜が脳裏に蘇る。

もう久美子の体を知り尽くしているかのように、麗奈の指は的確に久美子の一番敏感な場所を突いてくる。

声が漏れそうになるのを必死に堪えながら、久美子も同じように麗奈のスカートに手を入れて、そのまま太ももの内側を撫でた。

「久美子?」

意外そうな声。そういえば、自分から触ったことはなかった。

自分がされているのと同じように、麗奈の股に指を押し当てる。自分の下着も随分濡れていると思ったが、麗奈はそれ以上だった。

しばらく合わせ目に沿って指を上下に動かす。湿っぽい生地感触は、水分を含んだ弾力のあるスポンジのようだ。

布を摘み上げて、肌との境目から指を入れてみた。

「ちよつとー」

耳元で、ひどく動揺した麗奈の声。構わず押し込むと、ぬるりとした感触があつて、熱い液体が久美子の指に絡みついた。

どうしたらいいのかわからず、適当に指を折り曲げてみる。指先が両側の肉に挟まれて、その生々しい感触に久美子は鼓動が速くなつた。

もつと奥に。さらに指を沈めたところで、麗奈が無理やり久美子の手を押しつけた。

「もうー。こんなところで、何考えてるのよー」

小声で批難しながら、体ごと仰け反る。

自分からしておきながら、何を言ってるんだらう。久美子は気持ち良さでぼーつとなりながら、引き抜かれた手を顔の前に持ってきた。

中指の先が、ねつとりと濡れて光っている。ほとんど無意識に口に含んだ。

「っー」

麗奈が隣で声にならない声を漏らした。

指先からした味はあまり美味しくなかったが、麗奈のものだと思つたとたまらなく興奮した。

指を抜いても、まだ麗奈の匂いが残っていた。鼻の下に当てると、嗅いだことのない匂いがした。

「久美子、いつからそんなふうに……」

「麗奈のせいだと思ふけど」

「元々じゃない？」

「麗奈のせいだと思ふけど」

2回言うと、麗奈が唇を尖らせてから笑った。

もう一度キスをする。全身が燃えるように熱く痺れた。

「帰ろうか」

「うん」

辺りはいつの間にか暗闇に包まれていた。

何を話すでもなかったが、心はすっかり軽くなっている。

行為自体には若干の物足りなさを覚えつつ、久美子はまだ上気した顔で家に帰った。

結局、これで丸く収まったのだろうか。

伝えようと思ったことも伝えていない。言葉にしなくても、昨日のあれで想いは伝わったのだろうか。

昼休みの件も、麗奈はしおらしく謝ってきた。もう大丈夫なのだろうか。

久美子がそんなことを考えながら、ぼんやり通学路を歩いていると、途中で秀一と会った。

「おはよう」

いつものように気のない挨拶をする。秀一との関係も、別に答えを出さなくてもいいのだろうか。

麗奈さえ良ければ、久美子自身は何も変えたくない。ずるいと言われても構わない。そういうずるくてちっぽけな人間性を、麗奈は好きになってくれたのではないのか？

挨拶から数十歩。秀一が何も言わないので、久美子は首を傾げて顔を見上げた。

「何？」

秀一は久美子を見ずに、何やら不機嫌な表情で黙っていたが、やがて重々しく口を開いた。

「お前、昨日高坂と何してたんだ？」

「何って、何が？」

「夜だよ」

ぶつきらぼうに投げられた言葉で、久美子は冷水をかけられたように一気に目が覚めた。

昨夜、宇治川の堤防で麗奈としていたすべてを、秀一に見られた？ あんな帰り道でもない場所で、偶然に？

いや、違う！

刹那、久美子はすべてを理解した。

あれは、麗奈がわざと見せたのだ。昨日の朝、久美子が声をかけた時点から仕組まれていた。

麗奈がすぐには話したがらず、帰りに自分から声をかけると言ったのは、秀一の帰宅時間に合わせるためだった。帰り道で妙にキョロキョロしていたのも、秀一が見ていることを確認していたのだ。

久美子が顔色を変えて立ち尽くしたことが、そのまま答えになった。もとより、言い訳する言葉など持ち合わせていない。

「正直、気持ち悪いって思った」

冷めた声でそれだけ言って、秀一は一度も久美子を見ることなく行ってしまった。

……やられた。

呆然と立ち尽くしながら、自然と口元に笑みが零れる。

なんだろう、この清々しい気持ちは。変えたくないと思っていた関係を壊されてなお、麗奈に対して怒りの一つも沸いてこない。

ツンと澄ました余裕の表情で、一体どれだけ多くのことを考えていたのだろう。どれだけ焦り、どれだけ冒険したのだろう。そんな麗奈の心の内に思いを馳せると、むしろ可愛く思えてくる。

学校へ急ぐ。

乱暴に靴を履きかえると、階段を駆け上がった。そして、校舎の渡りで地味な反復練習をしていた麗奈の前に立って、仁王立ちで見下ろした。

「やってくれたね」

久美子が笑っていたせいかはわからない。麗奈は平然と顔を上げて、わざとらしく髪をかき上げた。

「もう気が付いたの？」

「秀一に三行半を突き付けられたよ」

「それは夫婦や恋人同士で使う言葉よ？ 不愉快だわ」

そう言いながら、麗奈がふふつと笑う。

トランペットを拭いて、ケースに仕舞う。それを見届けてから、久

美子は聞いた。

「結局、なんだったの？ あのお昼のも含めて」

「なんでもないわ。久美子を独り占めしたかっただけ。私は友達は一人でいいって言ってるのに、久美子は他の子と仲良くしてて、妬いちやったの。でも、お昼のはやりすぎたと思ったから謝ったでしょ？

嫌われたら意味がないし」

「別に嫌わないけど……」

頬を膨らませてそっぽを向く。文句の一つでも言っただろうと思っていたが、はつきりと「妬いた」などと言われたら、許すしかないではないか。

「麗奈は、本当に私のことが好きなんだね」

「いつもそう言ってるじゃない」

呆れたように肩をすくめた。

最終的には、深読みしすぎた。麗奈は、久美子の煮え切らない態度に苛立っていたわけではない。単純に、秀一の好意そのものを警戒していたのだ。

久美子を秀一に奪われるリスクと、秀一を排除することで嫌われるリスク。その二つを天秤にかけた末、麗奈は前者を大を見た。

葉月については後者を選んだ。確かに久美子は今、秀一は必要としないが、葉月と緑輝は失いたくない。麗奈はよく見ている。

「私も麗奈が好き」

そんな言葉が口をつく。

「わかってる」

「わかってない！ 私自身がわかってなかったんだから」

力いっばい否定すると、麗奈が驚いた顔をした。久美子は胸に溜まった息を吐き出した。

「麗奈に、全部思い出にするって言われた時、私本当に悲しかったの。部屋で一人で泣いて、怖くて、絶対に麗奈を失いたくないって思った。私、自分で思ってたより、ずっと麗奈のことが好きみたい」

あの晩、必死に麗奈のことを考えて、それでもわからなかった何か。それは、自分が考えるより、麗奈が黄前久美子という人間を好きだ

ということ。

久美子にはそんな自信はなかったし、自分もまたそこまで麗奈に依存しているとは思っていなかった。だから、いとも簡単に秀一のことを相談してしまった。

久美子が次の言葉を探して黙っていると、麗奈がすつと手を伸ばして、走ってきて乱れた久美子の襟を直した。

「ありがとう」

優しい眼差しで微笑む。

その声が本当に穏やかだったから、久美子は今回の一件はこれですよやく片付いたのだと、長い息を漏らした。

「もう試さないで。私は麗奈と、平和に過ごしたいの」

「たまには一波乱あった方が面白くない？」

「全然面白くない」

ぎゅつと一度、仲直りの握手をした。

朝のチャイムが鳴り響く。

雨降って地固まると言うが、出来ればずっと晴天でいてほしい。久美子は争い事が嫌いなのだ。

握り慣れた柔らかな手。

それが、いつも当たり前前にあるのだと、決して自惚れないように――

自分の手を引く麗奈の嬉しそうな横顔を見つめながら、久美子は固く心にそう誓った。

―― 完 ――

日常の隣で 4

1

耳をつんざくような破裂音の後、硬い物の倒れる音と、床に落ちたと思われる金管楽器の悲鳴が響き渡って、久美子はビクツと身を強張らせた。

夕方遅くの音楽室には、パート練習を終えた多くの部員が集まり、思い思いに今日最後の時間を過ごしていた。

反射的に音のした方に顔を向けると、窓際に近い場所で、綺麗な長い黒髪の一年生がうずくまっていた。すぐ隣には、彼女の座っていた椅子が横になっている。バランスを崩した譜面台が時間をおいて音を立て、すでに床に転がっていたトランペットに重なった。

「麗奈！」

そう叫んだ久美子の声だけが、音楽室の防音材に吸収される。他には物音一つなく、その場にいた全員が息を呑んで立ち尽くした。

何が起きたのか理解できないように、頬を押さえて唇を震わせている麗奈の傍らに、二年生が立っている。後輩を叩いた自分の右手を見つめるその顔は、叩かれた麗奈以上に青ざめていた。

「優子……？」

消え入りそうな声がする。偶然久美子の近くにいた香織が、こちらにも信じられないものを見るように、目を見開いて震えていた。

久美子はバッグを放り投げて駆け出した。

いつかこんなことが起きるのではないかと、誰もが思っていた。

コンクールの参加メンバーをオーディションで決めることになり、学年に関係なく上手な者がA部門で出場することになった。同時に、ソロパートもオーディションが行われ、トランペットは三年の香織を差し置いて、一年の麗奈が選出された。

これに、多くの反対の声が上がった。確かに技術的には麗奈の方が上である。それは香織自身も認めている。しかし、高校の部活動において、実力だけが優先されるべきなのかと。

もちろん、これまでもそのように決められていたなら、誰も異存はなかっただろう。しかし、これは顧問が滝に変わった今年からの方針である。上級生が反発するのも無理はなかった。

それでも、全国を目指すという目標を掲げたのは自分たちであり、全国を目指すためにより上手な者がソロを担当するのは当たり前だった。

そういう趣旨のことを、周りの反発を抑え込むために麗奈本人が言ったから、彼女に対する風当たりはさらに強くなった。

麗奈は自分は正しいことを言っていると胸を張っていたが、彼女が強くあればあるほど周囲は彼女を煙たがった。

吹奏楽はチームワークである。一人だけが上手だからと言って、チームの和を乱す者が適任とは思えない。そんな声まで上がり始めたが、滝がそれに加担することはなかった。

結果として、麗奈への嫉妬と怨嗟の声を孕んだまま、部活動は続けられていた。

そんな最中のことだった。

発端となったのがどういうやりとりだったかはわからない。ただ、麗奈がいなければソロを演じられるはずだった香織を崇拜している優子が、その麗奈を平手打ちする理由など、そう多くはない。

「麗奈ー」

静寂の中、もう一度叫んで久美子は麗奈の肩を抱きしめた。その声に呼応するように、教室に音が戻ってくる。

不安を凝縮したようなざわめき。

それでも、こうして麗奈に駆け寄るのは自分一人しかないのだと、久美子はどこか冷静にそんなことを思った。

「優子ー」

悲鳴に近い声を上げたのは、部長の晴香だった。顔を上げると、珍しく厳しい顔をした晴香が早足で近付いてくる。

それより先に、麗奈が立ち上がった。久美子を押し退けて、一步優子に近付いたかと思うと、その右手が優子の左頬を捕らえた。

パンツと小気味のよい音がして、優子が二歩よろめいて壁に手をつ

いた。

晴香の足が止まり、再び部室に静寂が落ちる。凜とした声が響いた。

「これでおあいこだから！ 何も問題は起きてないから！」

それだけで、何十人という部員すべてを黙らせる。麗奈は涙の浮かぶ目で威嚇するように周りを睨み付けると、実に手際よく片付けをして、久美子の腕を掴んだ。

「行くこう」

強く引つ張られる。

あまりの勢いに、久美子は思考がいつて行かなかった。ただ、麗奈に強く掴まれた腕の痛みが、なんだかとても嬉しかった。

麗奈は自分の教室まで来ると、乱暴に久美子を放り込み、すぐにドアを閉めた。

久美子はよろめきながら顔を上げる。教室には誰もおらず、窓の向こうに赤く焼けた空が広がっていた。

振り返ると、麗奈は床に座って壁にもたれていた。抱えた膝に頭をつけて、小さく肩を震わせている。

久美子はその前にしゃがんで、そつと麗奈の頭を抱きしめた。

「大丈夫だよ」

子供をあやすように、優しく髪を撫でてみる。こんなに弱々しい麗奈を見るは初めてだ。

しばらく髪を梳くように指を滑らせていると、麗奈が顔を上げた。瞳が涙で潤んでいるが、悔しいせいか、痛みのせいかはわからない。赤く腫れた頬が痛々しい。

「キスして」

随分ストレートに、麗奈が言った。

久美子は一瞬ためらった。廊下からは見えない位置だが、もう誰も戻ってこないと言うには、時間が早い。

もしドアを開けられたらと思ったが、目の前の友達が可愛すぎて、どうしてもよくなった。

そつと片手を頬に沿えて、唇を重ねる。軽く抱きしめ合って、味わ

うように30秒ほど。

顔を離すと、麗奈が頬を紅潮させて、うつとりするように目を細めていた。久美子は恥ずかしくなって目を伏せる。

もじもじした10秒。唐突に麗奈が言った。

「ほんと、あいつ、信じられない!」

見ると、先ほどまでの柔らかな空気はどこへやら、口をへの字に曲げて慥然としている。

先輩に向かって随分な発言だが、叩かれたのだからそれくらいは許してあげよう。久美子としても、世界で一番大切な友達を傷付けられて、少なからず腹が立っている。

「もう決まったことを、いつまでもいつまでもぐちぐちぐち、ほんつとにしつこいの!」

「優子先輩、香織先輩の信者だもんね……」

小さく笑って頷いた。陰口は言うのも聞くのも好きではないが、今日だけは仕方ない。

「私でいいじゃん。私の方が上手いんだから。何がいけないの?」

もう一度、抱えた膝に額をつける。顔を見せないようにするためだろうか。

「滝先生のやり方が気に入らないなら、辞めればいいのに」

納得がいかないと吐き捨てる。久美子は何も答えずに、そつと髪を撫でた。

麗奈はそれだけでは満足できなかったのか、まるで睨むように久美子の目を覗き込んだ。

「ねえ、久美子もそう思うでしょ?」

「そうだね」

久美子は渋々頷く。本当は、辞める辞めないというほど極端な話だとは思っていないが、今は麗奈に合わせておく。

麗奈はようやく口元に微笑みを浮かべた。

「よかった。私、間違っていないよね? 正しいことをしてるよね?」

質問を重ねる。久美子は答えに詰まった。

間違ったことは言っていないが、正しいことをしているかと言われ

ると、どうだろう。友達として全面的に背中を押してあげたいが、もう少し敵を作らない態度を取った方がいいのではないかと思う。

しかし、先ほどの音楽室での周囲の様子を見ても、麗奈には本当に自分しか友達がいらない。せめて自分だけは味方になってあげなければと、妙な親心が働いて、久美子は大きく頷いた。

「麗奈は正しいよ。ソロも、麗奈が吹いた方が絶対にいい成績が取れる」

胸がチクリと痛んだ。どうしても、片方を応援すると、もう片方を貶めた気分になる。はつきりと自分の意見を口にするのは苦手だ。

麗奈は小さく笑ってから、そっと久美子の体を抱きしめた。

「安心した。ありがとう、久美子」

そう言った麗奈の声が本当に安らいでいたから、久美子はまあいいかと思った。

音楽室での一件は、あの状況下において、本当に麗奈が上手く鎮めたと思う。

恐らく晴香は、優子を非難する言葉以外、持ち合わせていなかっただろう。優しい性格だが、有事の対応は得意ではない。

優子自身も後悔していたのは明白であり、麗奈が喧嘩両成敗に行っていたのは、優子にとっても有り難かったはずだ。

滝の耳まで届いたかはわからないが、あの後二人が呼び出されるようなことはなかった。きつとあの一件は、このまま流れてくれるだろう。

その日、久美子は緑輝と葉月と3人で帰った。麗奈が、「今私と帰ると、久美子まで目をつけられる」と心配してくれたのだ。

その言葉にそのまま乗っかる自分もどうかと、落ち込みながら歩いていると、唐突に緑輝が言った。

「緑は、ソロは香織先輩が吹くべきだと思うな」

驚いて顔を上げる。緑輝が珍しく眉間に皺を寄せて、不機嫌そうに唇を尖らせていた。

「どうして？ よくわからないけど、高坂さんの方が上手なんでしょ？」

葉月が意外そうに聞き返す。

「それはそうだけど、年功と実力のバランスもあると思うし」

緑輝が難しいことを言う。要するに、年上を少しくらい立ててもいいのではないかということだ。

緑輝は聖女出身である。吹奏楽の名門から、どうして北宇治のような弱小に来たのかというと、競争の無いところで純粋に音楽を楽しみたかったと聞いたことがある。

そういう意味では、今の滝のやり方は、何か緑輝に昔の嫌なことを思い出させるところがあるのだろう。せつかく緩い吹奏楽部に入つたのに、結局また昔の空気に戻ってしまったわけだ。

葉月が納得できない顔をする。

葉月は運動部上がりである。学年に関係なく、ただ実力だけで勝敗の決まる世界を生きてきて、それを当然だと思っている。

全国を目指すなら、より上手な人間が担当するべきという彼女の意見ももつともだった。

そんな葉月に、緑輝が言った。

「滝先生が来る前は、北宇治はそんな学校じゃなかったんだよ？ 久美子ちゃんの話だと、高坂さん、立華の推薦もらってたんでしょ？ だったら、どうして北宇治に来たのってこと」

これには葉月もうーんと考え込む。その隣で、久美子も思わず腕を組んだ。

そういえば、初めてキスをした森の中で、麗奈は北宇治に来た理由は久美子がいたからだと言った。それは結局嘘だったのだが、その後本当の理由を聞いていない。

「レベルの低い北宇治なら、絶対にソロをやれるし目立てる。そう思ったのならわかるけど……」

眩きながら、緑輝はそれはないと首を横に振った。久美子も同感である。

麗奈はそんなお山の大将で満足する人間ではない。そもそも、麗奈の実力なら立華に行っても一番になれる。

「吹奏楽とは関係ない理由なのかもね」

葉月があまり興味なさそうにそう言っ、その話はそこで終わった。

翌日、久美子の予想通り、部活は何事もなかったかのように行われ、部員の空気もいつも通りだった。

いつも通りというのは、もちろん麗奈に対しては冷たいという意味だが、相変わらず麗奈は気にしていないようだった。

本当に平気なのか、久美子は前に一度聞いたことがある。せめて自分の前では無理をしなくていいと言ったら、麗奈は慥然としながらこう返してきた。

「久美子は、私を悲劇のヒロインにでもしたいの？」

それ以来、久美子は麗奈は本当に大丈夫なのだ信じることにした。確かに、自分なら堪えられないから、麗奈もそうなのだ決め付けていた。麗奈はきつと、自分よりずっと強いのだ。

練習を終えてマウスピースを洗っていると、小さな足音が近付いてきた。顔を上げて確認すると、昨日麗奈を引っ叩いた優子だった。

そのまま通り過ぎてくれるのを願ったが、優子は久美子の隣で足を止めた。

「黄前さん、少しいい？」

背筋がゾクツとした。優子に呼びかけられたのは初めての気がする。

昨日の光景が脳裏に鮮やかに蘇る。大事な友達を叩かれた怒りもあったし、自分も叩かれるのではないかという恐怖も沸いてくる。

「なんですか？」

声が震えた。

「そんなに怖がらないで。昨日のは本当に私が悪かったから。ごめんなさい」

優子が申し訳なさそうに頭を下げた。

久美子は意外に感じた。謝る相手が違うとは思ったが、この先輩が素直に他人に頭を下げるとは思わなかった。

優子が踵を返して歩き始めたので、久美子は仕方なくついて行くことにした。理由をつけて断る方が、久美子には難題に思えた。

優子は適当な空き教室に入ると、机の上に座った。

「黄前さんは、ユーフォ、長いんだっけ？」

「7年になります」

短く、端的に答える。自分が警戒していることに、優子も気が付いているようだった。

「夏紀、高校からユーフォを始めたの。元々そんなにやる気もなかったし、あんまり上手じゃないでしょ？」

探るような目で優子。夏紀は久美子の先輩で、優子の同級生。久美子と同じユーフォニアムを吹いているが、優子の言う通りあまり上手ではなかった。

久美子は何も答えなかった。夏紀より上手い自負はあるが、先輩を下手だとは言いたくないし、優子の意図がわからないので安易な同意は憚られる。

もっとも、その沈黙は肯定と同じだった。優子は一度頷いてから、視線を逸らせて窓の向こうに目をやった。

「上手な黄前さんがAで、夏紀がB。夏紀もそれで納得してる」

「香織先輩は納得してないっていう話ですか？」

「もし逆に……」

久美子の質問を遮るように、優子が言葉を続けた。

「黄前さんがBで、夏紀がAだったらどう思う？ 誰が聴いても黄前さんの方が上手なのに、学年が上だからっていう理由で、夏紀がAだったら」

「それは、ちよつと悔しいです」

少し考えてからそう答える。

緑輝には悪いが、やはり上手な者が評価されるべきだと思う。久美子は決して闘争心の強い方ではないが、打ち込んでいることが認められないのは悔しい。

「じゃあ、もしそうになったら、黄前さんは部活を辞める？ それとも、Bで我慢して続ける？」

話が見えてきた。

吹奏楽部に二年生が少ない理由。滝が来る前まで、この部では技術

の優劣に関わらず、学年が上の人間がAだった。それに反発した現二年生が、一斉に吹奏楽部を辞めていった。

もし自分がそうなら……。

「そうなってみないとわかりませんが……続けるかもしれません。音楽は好きだし……」

「そう」

優子はあまり興味がないように頷いた。

「じゃあ、1年経って、次のコンクールでも同じようにBだったら？」

一生懸命努力して、それでもやっぱりやる気のない夏紀がAだったら、黄前さん、どうする？」

音楽が好きで、コンクールに出るために頑張って、それがまったく報われなかったら。明らかに頑張っていない先輩がAで出場して、銅賞で満足して笑っていたら。

想像しただけで悲しくなる。夏紀のことはもちろんただの例だが、やはりその先輩に対して腹も立つし、顧問や風習に反発もするだろう。

何も言えない久美子に、優子が声の調子を柔らかくして言った。

「悔しい思いをして続けてきて、ようやく三年生になりました。夏紀も卒業しました。やっとコンクールにAで出られるかと思ったら、すごく上手なユーフォの一年生が入ってきました。どう思う？」

ああ……。

久美子は理解した。

香織は、ずっとBだったのだ。あんなにも上手なのに、認めてもらえなかった。

それでも腐らずに頑張ってきて、実力もつけて、満を持して迎えた高校最後のコンクールの直前に、反則レベルの新入生が入ってきた。

「今までなら、上手な一年が入ってきてても黄前さんがAだった。2年間それで我慢してきた。実力も伴っている。それが今年から、いきなりやり方が変わって、その子がAで黄前さんはBになりました。どう思う？」

「それは……」

想像しただけで悲しくなった。思わず頭を抱える。

自分の3年間はなんだったのだろう。そうだったわけでもないのに、目頭が熱くなる。

「高坂さん、上手だと思うよ。私だって、高坂さんが香織先輩より上手なのはわかってる」

優子がため息をつく。

「でも、香織先輩も十分上手だよ？ 2年間、ずっと我慢して練習して、本当に上手になって、ようやくソロが吹けると思ったら、ソロは一年生になりました」

熱くなった頬に涙が零れるのがわかった。

頭がくらくらする。あまりにもひどすぎて、事実であることを心が拒否している。

呆然とする久美子の頭上で、無機質な優子の声があった。

「ねえ。私やみんなが、香織先輩にソロを吹いてほしいって思うの、間違ってる？」

その日も麗奈はツンと澄まして、誰とも話さずに一人で練習していた。

思えば、麗奈が他の部員と喋っている姿を、ほとんど見たことがない。ましてや、部活に関係ない雑談となると、完全にゼロである。

友達は一人でいいと、麗奈は言った。久美子の前では楽しそうにしてくれるが、それ以外の多くの時間を一人ぼっちで、寂しくないのだろうか。

「麗奈」

声をかけると、久美子の大事な友達ほんの少しだけ表情を和らげた。胸がチクリと痛む。

果たしてこれから自分がしようとしていることは、正しいのだろうか。そもそもそれは、誰にとって正しいのだろうか。

麗奈を昨日と同じ空き教室に導きながら、久美子は悩んだ。昨日優子に言われて、夜遅くまでさんざん悩み抜いた末に出した答えなのに、いざ麗奈の顔を見たら心が揺らぐ。

今その時目の前にいる相手が、一番嬉しいことを言う。そんな八方美人な人生を送ってきたせいで、何が自分の意見なのかわからなくなってしまう。

「単刀直入に言うと、ソロを香織先輩に譲ってあげてほしいの」

二人の他には誰もいない教室で、久美子はぼつりとそう切り出した。

まともに顔が上げられない。麗奈のスカートが、動揺のせいか少しだけ揺れた。

音楽室から、色々な楽器の混ざり合った無秩序な音が聴こえてくる。グラウンドからは、運動部の元気な掛け声。その中で、この教室だけがとても静かだ。

「ちよつと、意味がわからないんだけど」

麗奈の声がかすれていた。一度ツバを飲み込んで顔を上げると、麗奈はあらゆる感情の欠落した表情で久美子を見つめていた。

久美子はいたたまれなくなつて、もう一度視線を落とした。

「ほら、陰口とか、ひどいし……」

「そんなの気にならないけど」

「香織先輩も、ほら、上手だし……」

「私の方が上手よ？」

「でもほら、香織先輩、三年生だし……」

「上手な人がやるつて、滝先生が言ったよね？」

少しづつ、麗奈の声が熱を帯びてくる。明らかに苛立っている。

「香織先輩、頑張ってるし……」

「私だつて頑張ってるわ」

「みんな、香織先輩に吹いてほしそうだし……」

「その『みんな』に、久美子も入ってるの？」

「えっ？」

思わず顔を上げると、冷たい瞳が久美子を貫いた。

「優子先輩に何を言われたの？」

冷静な中に、微かに混ざる動揺。久美子は一瞬、息をするのを忘れた。

香織先輩に吹いてほしい「みんな」に、自分が入っているのだろうか。今べらべら喋っていることは、果たして自分の意見なのだろうか。

昨日優子に言われた話が、脳内で再生される。あれを聞かせれば、麗奈の考えは変わるだろうか。そもそも自分はそれを望んでいるのか？

目を見開いて、思わず頭を抱えると、麗奈が心配そうな瞳で、そつと久美子の髪に触れた。

「優子先輩に何か言われたのね？ でも、大丈夫よ。ごめんなさい。貴女まで巻き込んで」

「あつ……」

違う。違う！

久美子は麗奈の手を払い除けるように、頭を大きく振った。

優子は関係ない。たまたま教えてくれたのが優子だっただけで、過

去の経緯を知って香織にソロを吹いてほしいと思ったのは、他でもない自分だ。

昨夜さんざん考えて、香織にソロを譲ってもらおうと、久美子は自分の意思でそう決めた。優子は関係ない。

久美子は一度口を引き結び、真っ直ぐ麗奈の目を見た。

「私も、香織先輩がソロを吹くべきだと思った。優子先輩の希望も、香織先輩の思いも関係ない！」

「久美子？」

麗奈が驚いた顔をして、行き場をなくした手を下ろす。綺麗な眉が思案げに歪む。

「香織先輩、あんなに上手なのに、去年も一昨年もBだったんだよ？」

それでもずっと頑張ってきたんだよ？ 一度くらい、コンクールでソロを吹かせてあげようよ！」

「だから私に、一昨年の香織先輩と同じ目に遭えって言ってるの？」

「……っ！」

震えるほど静かな麗奈の言葉に、久美子は息を呑んだ。

ただ香織の努力が報われて欲しい。そう思ってたのだった。

麗奈には我慢してもらおうつもりだったが、それが香織と同じ目に遭わせることだとは考えなかった。

心臓が早鐘のように響く。

「麗奈には、来年があるじゃない」

「来年、すぐく上手な子が入ってきたら？」

「麗奈より上手な子なんて、入って来ないよ」

「そんなに私が上手なら、やっぱりソロは私が吹くべきよ」

ダメだ……。

気持ちが悪い。こんなにも激しく、自分の想いを誰かにぶつけたのはいつ以来だろう。

しかも、まるで伝わらない。話せば話すほど、麗奈の言っていることが正しいように思える。

いや、きつと麗奈が正しいのだ。そういう方針を、顧問の滝が示した。我が儘を言っているのは自分の方だ。

俯くと、床に涙が零れた。無性に悔しい。

「香織先輩に、ソロを譲ってあげて……」

「最後は感情論？」

「お願い」

「絶対に嫌」

はつきりとした拒絶。その言葉の冷たさに、数日前の音楽室の光景を思い出した。

思わず麗奈を叩いた優子。きっと今みたいに、正論でねじ伏せられたのだ。この冷酷な正しさの前に、自分たちの熱意はこんなにも無力だ。

「どうして……」

「何が？」

「どうして、北宇治なんかに入ったの？」

気が付くと、久美子は訊いていた。あの日、森の中で麗奈にはぐらかされた質問。

麗奈がなぜ立華を蹴って北宇治に来たのか。自分も、緑輝も、立華に行った旧友の梓も、誰もがそれを疑問に思った。

「最近の北宇治は、別に吹奏楽の強い学校じゃなかった。そんなにも冷淡に、実力だけで評価されたいなら、どうして北宇治なんかに入ったの？ 立華にでも行けばよかったじゃない！」

勢いよく顔を上げると、涙がキラキラと光って散った。

「北宇治はみんな仲良く楽しくの学校だった。偶然滝先生が来たから、麗奈は一年なのにソロになれただけなんだよ？ もし滝先生が来てなかったら、麗奈はソロどころか、Bだったかもしれない。それとも何？ 滝先生が来て、こういうふうになるって知ってたって言うの!？」

久美子の持つ最後のカード。

一体誰のためにこんなにも必死になっているのか、久美子にももうわからない。ただ、言葉が止まらない。

そんな久美子の切り札に、麗奈は一度瞳を伏せた。それから深く長く息を吐いて、優子に向けた冷たい眼差しで久美子を見た。

「そう。知ってたの」

「何を？」

「滝先生がこの学校に来ることを。私、滝先生のために、北宇治に入ったの」

久美子は、その言葉をすぐには理解できなかった。

理解した後、麗奈はでたらめを言っているのだと思った。言い返せなくなつて、適当なことを言っているのだと。

「元々知り合いなの。滝先生がこの学校に来るって知って、私は立華を蹴った。私、滝先生が好きなの。だから、滝先生が期待して選んでくれたソロを降りるなんて、絶対にしない」

……………。

……………。

今、麗奈は何を言った？

何も考えられず、呆けたように立ち尽くす。そんな久美子をしばらく睨み付けてから、麗奈は目を閉じて首を振った。

「もういい」

吐き捨てられた4文字。

もう話すことは何もないと言わんばかりに、その一言だけを残して、麗奈は教室を出ていった。

ベッドに寝転がると、あまりの気持ちの悪さに、先ほど胃に詰め込んだものを戻しそうになった。

食欲などまるでなかったが、「せっかく作ったご飯を捨てろと言うのか」と言われたら、食べないわけにはいかない。所詮自分は子供だ。

一度ツバを飲み込んで、胸を落ち着かせる。学校を出てから、ずっと動悸が収まらない。

麗奈の言葉が、ようやく理解できてきた。元々滝に師事するために北宇治に来たという麗奈。思い返せば、過去の不可解な言動もすべてすべて合点がいく。

ただ、台詞の間に挟まれた一言が、上手く解釈できない。

——私、滝先生が好きなの。

あれはなんだっただろう。恋愛対象として好きということだろう

うか。きつとそうなのだろう。

少し前、幼なじみの秀一が久美子を好きだと知って、麗奈はひどく焦っていた。最後には秀一を罫にはめ、その想いを排除した。

その麗奈が、滝を好きだと言ったのか？

この際、秀一のことはどうでもいい。自分は別に彼を好きではない。ただ、あれだけ久美子を誘惑しておいて、麗奈が普通に異性を好きだったということが、受け入れられない。

自分是从からかわれていただけなのだろうか。それとも、これまでのすべては友情の延長だったのだろうか。

麗奈には久美子しか友達がいらない。麗奈は「友達」に対してああいうことをする女の子だったという、それだけのことだろうか。

しかし、久美子は違う。麗奈を、葉月や緑輝とは違う目で見ていた。本当に好きだった。それは一方的な想いだったのだろうか。

わからない。わからない上、もう考えても仕方がない。

麗奈とのすべてでは終わってしまった。超えてはいけな一線を超えてしまった。彼女が一番大切にしているものを、真つ向から否定してしまった。

「何してるんだろ、私……」

目の上に腕を乗せる。涙が耳の方に流れていく。

香織にソロを譲ってほしい。そう頼んで、麗奈がどんな反応をする想定だったのか。

少し考えればこうなるとわかったはずなのに、昨夜は何時間も考えた末、麗奈が笑顔で承諾してくれると思った。どうしてだろう。

結局、自分勝手なのだ。高坂麗奈という人間を、まるで見ていなかった。

麗奈はトランペットを愛している。音楽を生き甲斐にしている。それなのに、自分が頼めばOKしてくれると自惚れた。

それを見透かされた。この結果は、当然の報いだ。

今度こそ無理だ。これまで様々なすれ違いを乗り越えて、ケンカするたびに絆を深めてきた。麗奈となら、ずっとやっていけると思っていた。

けれど、今度こそ本当に無理だ。麗奈の眼差しはもう、友達を見る目ではなかった。

ふらふらと、夢遊病者のように起き上がる。スマホを開くと、待ち受け画面で麗奈が笑っていた。

ぎゅっと抱きしめる。

「……………うう……………」

喉が熱くて息が苦しい。二人で積み重ねてきた時間が、全部思い出になってしまった。もう二度と、麗奈の温もりに触れることはない。

こうして人は、失敗を繰り返しながら、大人になっていくのだろう。大切なものを失いながら、何度も朝を迎えるのだろう。

そしていつか、この胸の痛みも、本気で人を好きになったことも、懐かしく思い出すのだろう。お酒でも飲みながら、その時隣にいる誰かに、苦笑いしながら話すのだろう。

「うわああああああああっ!!」

久美子は大声を上げた。頭から布団をかぶり、枕に顔を押し付けて絶叫した。

麗奈の名前を何度も何度も叫びながら、文字通り気を失うまで泣き続けた。

翌日、気が付いたら久美子は学校にいた。

誰かに「おはよう」と言われたが、顔も上げなかった。

葉月と緑輝が心配してくれたが、机に突っ伏したまま動かなかった。

授業中に当てられたが、何も言わなかったら怒られて座らされた。小テストは白紙で提出した。

何の言葉も耳に入らない。誰の声も心に届かない。

もう何も見たくない。何も聞きたくない。どんな傷でも時が解決するというのがなら、いつかその時が来るまで心を閉ざそう。

虚ろな瞳で音楽室にいた。隣に誰がいるのかもわからない。膝の上にユーフォニアムがあるが、いつ用意したのかも覚えていない。

滝が入ってくる気配がした。反射的に立ち上がり、礼をして、座る。きつと怒られるだろう。追い出されるかもしれない。それならそ

れでもいい。そういうことを考えることさえ億劫だ。

「先生、いいですか？」

その日初めて、久美子の鼓膜を震わせたのは、世界で最も愛した同級生の声だった。

ゆっくり顔を上げると、全員が椅子に座っている中、麗奈だけが立って真っ直ぐ滝を見つめていた。

意志の宿る黒い瞳。引き結んだ唇。静かな、それでいて力強い声で、麗奈が言った。

「先生、私をソロから降ろしてください」

教室が静まり返った。

久美子も意識を引き戻された。思わず目を見開いて麗奈を見る。

「どうしてですか？」

あくまで穏やかな滝の声。しかし、麗奈を見つめる目には非難の色があった。

その目を真つ向から睨むように見つめ返して、麗奈が口を開く。

「一身上の都合です。迷惑を承知のお願いです」

「ソロを中世古さんに譲るということですか？」

「後任を誰にするかは、私の決めることはありません」

全員が、息をするのも忘れて見守っている。ふと隣を見ると、あすかが座っていた。他人に興味のないあすかですら、驚いた顔をしている。

思わず香織の姿を探すと、斜め前に座っていた。後ろからなので表情はわからないが、上げた顔は麗奈に向けられている。

物音ひとつしない音楽室に、いつもより低い滝の声が浸透する。

「理由は、聴かせてはもらえませんか？」

「つまらない理由なので、話したくありません。でも、私には大切な理由なんです」

麗奈は引き下がらない。昨日、絶対にソロを降りないと言った時と同じ強い瞳で、今度は麗奈が好きだと言った滝を相手に、ソロを降ろせと言っている。

久美子は混乱した。元々働きの悪い思考回路に、今の事態は処理できない。

永遠に近い20秒ほどの沈黙があった。いたたまれずに周囲を見ると、あれほど麗奈を降ろしたがっていた先輩たちが、みんな俯いて気まずそうにしている。

なんて勝手なのだろうと思ったが、すぐに自分も人のことは言えないと気が付いた。むしろ、一度は麗奈に味方しながら裏切った自分が、一番卑怯な気がした。

滝がため息をつき、それから香織に目をやった。

「中世古さん。高坂さんがソコを降りるなら、私はソコを中世古さん
にお願いしたいです。どうですか？」

張り詰めた空気。麗奈は五線の引かれた黒板を凝視したまま、ピク
リとも動かない。

「二日、考えさせてください」

ようやく、香織がそれだけ言った。動揺した声。喜怒哀楽はわから
ない。

「わかりました。私としては、中世古さんをお願いしたいです」

滝が小さく頭を下げてから、鋭い瞳を麗奈に向けた。

「それから、もし中世古さんが引き受けたら、その時点で今回のコン
クールでは、高坂さんがソコを吹くことは絶対にありません。いいで
すね？」

「はい」

一切の迷いもなく、麗奈がはつきりと頷いた。

各自パート練習のために解散になったが、久美子はぼんやりしたま
ま座っていた。

ふと光が遮られて、顔を上げると、麗奈がなんとも言えない表情で
久美子を見下ろしていた。

「ひどい顔をしてるわね」

そつと頬に触れられる。麗奈の手はひんやりしていた。

撫でられた皮膚がざらざらしている。昨日泣き続けて荒れた肌。
目の下にはクマができ、ブラシの一つもかけてこなかった髪はボサボ
サだ。

「少し熱があるわね。今日はもう帰った方がいいんじゃない？ 私か
ら滝先生に言おうか？」

額に手を当てながら、麗奈が心配そうな顔をする。

たった今、あれだけ滝の期待を裏切りながら、平然と話しかけに行
くという。この子は一体、どれだけ心が強いのだろう。

ふわふわした頭でそんなことを考える。

上手く言葉が出て来なくて、久美子は黙って麗奈の顔を見つめてい

た。麗奈は特に急かすでもなく、そんな久美子を楽しそうに眺めながら、優しく髪を撫で続ける。

まるで音楽室に二人しかいないような時間。それを打ち破ったのは、三年生の先輩だった。

「麗奈ちゃん、ちよつといい?」

言うまでもなく、香織だった。いつもの温和な微笑みはどこへやら、綺麗な顔が不機嫌に歪んでいる。

麗奈はやはり無感情な目で香織を見た。

「この子も一緒に良ければ」

香織が怪訝そうに久美子を見下ろす。それからすぐに顔を上げて、「わかった」と頷いた。

麗奈に手を引かれながら、入ったのは優子と話した教室だった。麗奈と話したのもここだったし、これで三回目になる。

麗奈は適当な椅子に久美子を座らせ、香織のことなどまったく気にしていないように、久美子の髪を撫でた。まるで人形扱いだ。

「どうしてソロを降りの? それで、私が喜ぶと思ったの?」

香織の語気に怒りが混ざる。ドアの向こう側に人の気配がした。何人か野次馬がいるようだ。

麗奈は涼しい顔で答えた。

「言った通り、私の個人的な事情です。香織先輩には関係ありません」
「それを信じて? 私に同情して、ソロを譲ってくれたとしか思えない!」

「香織先輩がそう解釈するのは勝手ですけど、私は一言もそんなことは言ってませんし、私以外の誰がソロを吹こうが興味ありません」
久美子は二人の言い争いをぼんやりと眺めている。

麗奈の言った通り、熱があるらしい。頭がまるで働かない。

「納得できない。今のままじゃ、ソロは受けられない」

「じゃあ、断ればいいんじゃないですか?」

「そういうわけにもいかないでしょ!」

香織が怒鳴る。この人もこんなふうに感情的になるのかと、久美子は意外に思った。麗奈は人を怒らせる天才だ。

「みんな全国を目指して頑張ってる。そのためには、ソロは貴女が吹くのが一番いいって、みんなそう思ってる。私だって……」

「その割には香織先輩、ソロの練習してますよね？」
「っ!!」

香織の顔が赤くなる。9割方、怒りのためだろう。

ソロが麗奈に決まった後も、香織はソロパートの練習をしていた。もちろん、麗奈にもしものことがあった時のためだろうと久美子は思っていたが、そうではなかったのかもしれない。

「私を、バカにしてるの?」

香織の拳が握られる。それが麗奈を傷付けることがないよう、久美子は祈った。

麗奈が大きいため息をついた。

「私は、本当に香織先輩には興味がないんです。ごめんなさい」

それは、どんな非難よりも辛辣な一言だったかもしれない。香織が本当に悲しそうな顔をした。

「じゃあ、どうしてソロを降りたの?」

力ない声。さすがに悪く思ったのか、麗奈は一度久美子の髪を見下ろしてから、真っ直ぐ香織の目を見つめた。

「この子がそうしろって言ったからです」

ポンと、両手を久美子の肩に置く。

「つまらない理由ですよね? それに、もしあの場でそんなことを言ったら、久美子が槍玉に挙げられる。きっと誰も信じてくれない。でも、本当にそれだけなんです。たったそれだけが、私にはすごく大事なことです」

久美子は、心の整理は後からすることにした。展開があまりにも急すぎて、心も頭もついていけない。

30秒くらい、香織は唾然としたまま視線を彷徨わせ、最後に久美子を見た。

「久美子ちゃんは、どうして麗奈ちゃんにそんなことを?」

久美子は視線を落とした。

何か答えなくてはいけない。熱っぽい頭をフル回転させる。

発端は優子の一言だった。ただ、それを言えば今度は優子が非難される。それに、麗奈に言った通り、優子は事実を教えてくれただけで、直接は関係ない。

すべては自分の思いなのだ。

——香織先輩のソロを、私が聴きたかったからです。

言いかけたその言葉を飲み込む。もしそう言えば、久美子の個人的な希望で、部全体のとてん大事なことを変えてしまったことになる。

それは事実なのだが、香織が良しとするはずがない。もう一度麗奈を説得するよう言われるだろう。

——麗奈より、香織先輩がソロを務めた方が、全体のバランスが良くなります。

それも無しだ。そうしたら、みんなが麗奈を嫌いという感情論で、演奏が下手になっていると認めることになる。それはきつと、香織を傷付ける。

上手く言葉が出て来ない。髪を撫でる麗奈の手の感触だけが温かい。

「私に、同情したの？」

香織の声に非難と困惑が混ざる。突然の第三者の登場。麗奈の理由は恐らく香織にとつて、まったくの想定外だったろう。

麗奈は何も言わない。ただ、突き放しているわけではない。子供のお遣いを見守る母親のような気持ち。それが、髪に触れる指先から伝わってくる。

「そうです」

はつきりと、久美子は頷いた。

きつともう、何を言っても香織を納得させられない。それなら、本音ベースで肯定しよう。

ずっと努力が報われなかった香織が可哀想だった。上から目線で同情した。それがたった一つの真実だ。

「私、嬉しくない……」

香織が項垂れて、悲しそうに瞳を伏せる。涙声はかすれて、熱を帯びていた。

久美子は何も言えない。

重苦しく沈澱する空気を、やはり麗奈が立ち切った。

「もういいですか?」

顔を上げた香織の瞳から、涙が零れ落ちた。綺麗な滴が頬を伝う。淡々と、麗奈が言った。

「この子は自分の気持ちを素直に言っただけで、ソロを降りる決断をしたのは私です。この子はただ、理不尽な理由でずっとBだった香織先輩に、ソロを吹いてほしかっただけです。優子先輩も、みんなもそうです。香織先輩にソロを吹いてほしいだけで、私を降ろしたいわけじゃないんです」

麗奈が久美子の手を引いた。急に立ち上がったからか、眩暈がして思わず麗奈に寄りかかった。

「その『みんな』に、麗奈ちゃんも入ってるの?」

聞き覚えのあることを、香織が言った。

「さっき言った通り、私は、香織先輩には興味ありません。私は、この子のことだけでいっぱいなんです」

香織がどう思ったのか、久美子にはわからない。傷付けたかもしれない。

ただ翌日、みんなの前で、香織はソロを引き受けると宣言した。

その事実だけで、久美子は良しとした。

今はもう使っていない演劇部の部室は埃っぽくて、歩くと靴の跡が残った。

入口のドアの鍵をかけると、麗奈は部室のさらに奥、準備室という名の物置部屋の鍵を開ける。

何やら演劇の道具がごちゃごちゃ置かれた奥に、大きめのソファが置いてあった。そこだけ綺麗に雑巾で拭かれた形跡がある。

麗奈は準備室のドアにも鍵をかけて、電気をつけた。

「要は、お昼なら問題ないと思うの」

独り言のようにそう言ってから、明るく笑う。確かに、夜ならわずかに漏れる光も目立つが、日中ならわからない。ましてや土曜日の昼ならなおさらだ。

突っ立ったままの久美子の手を取って、ソファに座らせる。隣を空けたが、麗奈はそこには座らずに、正面から久美子を抱きしめた。

「はあ、良かった」

麗奈が独りごちる。久美子は麗奈の背中に手を回して、その体を強く引き寄せた。

もう二度と、一生触れることはないと言った麗奈が、腕の中にいる。そう考えるだけで、涙が溢れてくる。

「私、前に一波乱あった方が面白いつて言ったけど、あれ嘘だから。もうそろそろ勘弁して。私は久美子と平和に過ごしたいの」

「それ、私が前に言った」

無言で抱きしめ合ってから、どちらからともなく唇を重ねる。くちやくちやと、わざと音がするように激しく舌を絡めてから、麗奈が顔を離れた。

「本当に、いい加減にして。なんなの？ 久美子は私に意地悪してるの？」

「してないけど……。麗奈も、色々考えた？」

「当たり前でしょ！」

ぴしゃりと言いつ放つ。怒られたのになぜか嬉しかった。

「麗奈は平気なのかと思った。私、ほとんど死んでたのに、麗奈はいつも通りだったし」

「平気なわけないじゃない」

麗奈が呆れたように息を吐いて、久美子の隣に座った。

「私がどれだけ今回のソロを大事にしたか、少しは考えてくれた？」

「なんなの？ なに簡単に懐柔されてるの？」

「だって、香織先輩が可哀想で……」

「また来年、可哀想な先輩が現れて、私はソロが吹けないのね。わかっただわ」

「怒ってる？」

「怒ってるに決まってるじゃない！」

麗奈が声を荒げて、久美子は思わず身をすくめた。

「なんなの？ 本当に楽しみにしてたソロは吹けない。滝先生には呆

れられる。あの後滝先生に呼び出されて、ため息つかれたのよ？　なんなの？　私が久美子と塚本の仲をぶっ壊した仕返しなの？」

「ああ、それ、一応気にしてるんだ」

全然関係ないことに、えへへと笑う。麗奈がきつく睨み付けて、パチンと音がするくらい強く、両手で久美子の頬を挟んだ。

「久美子。今回は私、本当に貴女を捨てるつもりだった」

「うん……」

「あの日家に帰ってから、トランプペットとか、ソロとか、滝先生とか、自分の好きなものを並べて、よく考えたの。そうしたら、ソロと貴女が残った」

「滝先生は？」

「久美子に聞かれたから、この学校に来た理由を話しただけよ。今でも好きよ？　尊敬はしてる。でも、今は久美子が一番好きだって、そんなこと、わかってるでしょ？」

真顔で言われて、久美子は曖昧に笑って頷いた。

久美子はいっだって自分に自信がない。今回も、本当にもう麗奈とは終わってしまったと思った。

「昨日、朝から貴女の元気がなかった。それで、久美子もいっばい悩んでくれたんだなって思ったら愛おしくなって、ソロももういいやって思ったの」

「いっばい悩んだよ。今でもこうして麗奈と一緒にいられるのが信じれないくらい、本当に諦めた」

「なんでそこで諦めるの？　もつと関係を修復する方向に力を入れてよ」

麗奈が心底呆れたようにそう言って、久美子のはつとなった。確かに今回、麗奈に好かれる努力を何一つしなかった。嫌われたら、もう戻れないと諦めた。

そんな久美子を見て、麗奈が深い深いため息をついた。

「ケンカして、貴女が一人で諦めて、私が頑張って仲直りするこの流れ、なんとかならないの？」

「だって……。自信がないんだよ、私……。麗奈みたいな綺麗で、頭も

良くて、トランプペットも上手な子が、どうして私なんかを好きなんだろうって、今でも思ってるよ」

「なんで？ 私だっていっぱい欠点あるわよ？ 人付き合いは下手で、すぐに人を怒らせるし、性格は貴女と同じくらい悪いし、融通は利かない。冷たいってよく言われるし、人のために頑張るとか好きじゃないし」

さりげなく悪口を言われたが、流しておいた。

抱きしめられて、ソファに強く押し付けられる。乱暴に唇をむさぼられて、久美子はあまりの気持ち良さにくらぐらした。何度しても、キスは飽きない。

乱暴に掻きむしるように久美子の髪を撫でてから、麗奈はすくりと立ち上がった。

「罰として、今日は今から、私の命令に従いなさい」

強い口調で言い放つ。真顔で久美子を見下ろしているが、口元には隠しきれない笑みが浮かんでいる。

「えー……」

「いいじゃない。貴女に言われてソロも諦めた。香織先輩とケンカもした。今日も貴女と過ごすためにこの部屋を用意した。久美子も少しくらい私にサービスしてよ」

「わかったよ……」

渋々頷く。確かに今回、香織のためには勇気を出したが、肝心の麗奈のためには何一つ動いていない。

前に、愛を勘違いするなど怒られた。本当は、身内こそ大切にしないではいけない。

麗奈は満面の笑みを浮かべて、それからスマホを取り出した。

「じゃあ、脱いで。全部」

準備室には窓がなく、滞留した空気は古い匂いがする。

ふと顔を上げると、何かの劇に使ったのか、グロテスクな被り物が棚の上から顔を出していた。

「……はい？」

久美子はにっこり笑って麗奈を見上げた。麗奈はなんでもないようにスマホをタップしながら、もう一度同じ言葉を繰り返した。

「脱いで。全部。下着も」

「いやいやいや、どうしてそうなるの？」

「どうしてって。ケンカした後、いつもエッチなことするじゃない、私たち」

平然とそう言われて、久美子は思わず赤くなって俯いた。

確かにそうなのだが、それはたまたまそういう空気の中でそうなるのであって、別にそういう……。

「ごちやごちや考えなくていいから、脱いで。保健室で一回素っ裸になってるんだし、いいじゃない」

「あ、あれは……ほら、暗かったし……。ムードとか……」

「今日はそういうのはいいから。私は怒ってるの。命令に従って」

怒ってると言いながら、顔には意地悪な笑みが張り付いている。あからさまにからかっている。

久美子は諦めた。こんなに明るい場所で恥ずかしいことこの上ないが、それで麗奈が笑ってくれるなら、少しくらいは我慢しよう。

ホックを外してスカートを下ろす。今日は飾り気のない、水色の地味な下着で、もっと可愛いのを穿いてくれば良かったと後悔した。

「スカートから脱ぐのね」

「い、いいじゃない！」

「別にいいけど。照れてる久美子、本当に可愛い」

スマホがカシヤカシヤ音を立てる。

「ねえ、私の写真、本当に何に使ってるの？」

もそもそと上を脱ぎながら聞いてみる。あの森の中の土下座の写

真から今日まで、一体麗奈の持つ「久美子コレクション」とやらは、何枚になっっているのだろう。

「たまに見て楽しんでるだけよ?」

「変なことに使ってない?」

「変なことって?」

「わかんないけど……」

上を脱いだら、ブラジャーは紐の部分にもレースの入った、久美子の持っている中でもなかなか可愛いやつだった。ただいかんせん、上下お揃いではないし、何よりカップサイズが小さい。

「こんなことなら、もつとちゃんとしたのを着けてきたのに」

お腹が出ていないかとか、体形は変ではないかとか、色々気になって来る。

「変じゃない?」

「可愛いわよ?… こっちにきて」

促されて麗奈の前に立つと、麗奈が剥き出しになった太ももに触れた。ひんやりした指先の感触。それが下着を通過して、お腹まで撫で上げる。

「んっ……」

「気持ち良かった?」

「くすぐったいだけ!」

麗奈は楽しそうに久美子の体を撫でている。最近怒っている麗奈ばかり見ていたので、なんだかいつも以上に可愛く感じる。

「ねえ、麗奈も脱いでよ」

「嫌よ」

絶望した。

肩から腕のラインを指先でなぞってから、腋の下から手を入れる、ブラジャーのホックが外されて、肩の締め付けが緩んだ。

外したブラジャーをソファの上に置くと、麗奈は露わになった久美子の小振りの胸を手の平で包み込んだ。

「すごく恥ずかしいんだけど」

「だからいいんじゃない。羞恥心は大事よ?」

一度手を離して、数枚写真を撮る。麗奈にその気がなくても、何か間違つて流出とかしたらどうしよう、少し怖くなつたが、まあその時は麗奈に一生責任を取ってもらおう。

「肌、綺麗ね」

「そう?」

「噛んでいい?」

「痛くないなら」

最大限譲歩して許可すると、麗奈が子供のように顔を綻ばせた。どうもこの子は、性癖がおかしいように思う。

麗奈は久美子の胸を口に含むと、先端を舌先で転がした。痒いような感覚が全身を襲つて、身震いする。

それから舌で胸の曲線をなぞり、鎖骨の下の柔らかいところを甘噛みした。久美子は麗奈の頭を抱きしめる。

肩や腕の肉を歯で挟んだり吸つたりしながら、麗奈がそつとヘソに手を当てて、少し肌を押して下着に滑り込ませた。

じよりじよりと、麗奈の指先が縮れたヘアを撫でる。下着からはみ出すほどの量ではないので、処理とかしたことがないが、大丈夫だっただろうか。

麗奈が下着を下ろす。明るいところでまじまじと見られると、余計に心配になった。

「ねえ、変じゃない?」

「さあ。自分のしかじくくり見たことがないから、わかんない。普通じゃない?」

いかにもテキトーにそう言いながら、久美子をソファに座らせる。スマホでパシャパシャ撮られながら、一体自分は真つ昼間から、全裸で何をしているのかと冷静になった。しかも学校でだ。

「完全に変態だと思ふ」

「それでも私は、久美子が好きよ?」

「私じゃなくて!」

麗奈が久美子のそこそこ肉付きの良いお尻を撫でる。ソファの上に四つん這いで座らされると、麗奈が上からのしかかるように抱きし

めてきた。首筋に舌を這わせながら、左手でささやかな膨らみを包み込む。

右手はそつと久美子の股にあてがわれ、中指がいつの間にかしつとりと濡れた合わせ目に沈み込んだ。

指先の動きに合わせて、ぴちやぴちやとイヤらしい音を立てる。久美子はだんだん気持ち良くなってきて、体を支える力が抜けた。

ソファに崩れ込むと、麗奈が背中から覆いかぶさる。

「ん……んっ……。あつ！　くう……」

ぬるりと、麗奈の指が久美子の中に入ってきた。全身が痺れる。思えば、そこに何かを入れるのは、人生で初めてだ。

まったく経験したことのない感覚。じんじんして、肉の感触が生々しくて、それが恥ずかしさとブレントして頭の中が真っ白になる。

開きっ放しの口に、麗奈が左手の指を突っ込んだ。舌の上をかき回されると、大量の唾液が指を伝ってソファに流れ落ちる。

「久美子、すごくエッチな顔してる……」

「知らないし……」

麗奈は久美子の唾液でベタベタになった左手を、一度右手に絡めた。新しい液体を得た右手の人差し指と中指が、久美子の未発達の入口をこじ開ける。

それが中に入ってくると、下半身に痛みが走った。

「麗奈、待って。ちよつと痛い！」

「ダメ。待たない」

「麗奈！」

第二関節までねじ込まれると、ナイフで切られたような鋭い痛みが背筋を駆け上がり、久美子は思わず悲鳴を上げた。ソファの縁にしがみついて呻く。

「ああっ、痛い……麗奈、痛い。本当に痛い！」

「もつと力を抜いて」

「無理だし！　あああ、痛い痛い！　もうダメ！　やめて！」

麗奈が指を広げながら、関節で曲げ伸ばしを繰り返す。体が裂ける

ような痛みが断続的に突き上げて、久美子は身をよじらせながら叫んだ。

頭上で麗奈の呑気な声がする。

「久美子って、痛いのは好きだっけ？」

「それは私じゃない！ 麗奈でしょ!？」

「久美子の痛がる声、すごく可愛い。前に噛んだ時も思ったけど。宝物にする」

意味を問うより先に、麗奈が2本の指を根元まで突き刺し、一番深い場所を指先でこりこりと挟み込んだ。お腹を中から押される不思議な感覚。

しかし、そんなことよりも入口が痛すぎて、久美子は目がチカチカした。注射の針を刺された後、それをかき回されるような痛み。

「ああーっ！ 痛い！ うあああああっ！ 麗奈、もうやめて！ 痛い、痛いっ！」

本気で暴れると、ようやく麗奈が解放してくれた。指を抜かれても異物感が消えず、股間がひりひりする。

片手でお腹を押さえ、もう片方の手で涙を拭うと、麗奈を睨み付ける。麗奈はそれを気にせず、片手で器用に写真を撮ってから、先ほどまで久美子を苦しめていた指を突き付けてきた。

蛍光灯に照らされてぬらぬらと光る指先に、綺麗な赤が混じっている。何が楽しいのか、麗奈が満足げに頷いて言った。

「これでおあいこね」

「何がおあいこなのか、全然わかんない」

「いいからいいから」

麗奈がそっと抱きしめてくる。久美子も麗奈にしがみついて、キスをした。

ズキズキと嫌な疼きは消えないが、大好きな麗奈の匂いと、舌の感触に朦朧とする。髪を撫でられるのも好きだし、背中を引き寄せられるのも気持ちがいい。

あの森の中でのファーストキスみたいなのも、またしてみたい。やっぱり服も脱がせよう。肌と肌の触れ合う感触を、久しぶりに味わ

いたい。

「じゃあ、そろそろ部活に戻ろうか」

唇を離し、しれっとそう言った麗奈に、久美子はにっこり微笑んだ。
「そんなわけないでしょ?」

力いっぱいソファに押し倒す。

麗奈が可愛い悲鳴を上げながら横たわる。

自分の両手両足に挟まれて、麗奈がすぐ近くでじっと自分を見つめている。決して手放したくない、可愛い可愛い大事な友達。

「もうどこにも行かせないから」

静かにそう言ってから、もう何度目かわからないキスをした。
空が高い。

ユーフォニアムを抱えて、一人で中庭のベンチに座っている。来るはずの麗奈がなかなか現れない。

スマホを手にして、写真フォルダをタップする。サムネイルでわかる、明らかに異質な肌色の1枚を開くと、画面にいったい上半身裸の麗奈が映し出された。

照れて口元を隠している仕草が実に可愛い。形のいい大きなおっぱいも魅力的だ。

結局あの後、麗奈も裸にして、力尽きるまでイチヤイチャしたのだが、その最中に撮らせてもらったものだ。

自分が被写体としてどうかは別にして、麗奈が久美子コレクションを作る気持ちが少しだけわかった。

思わずにやにやししながら眺めていると、いきなり後ろから強く頭を叩かれた。驚いて振り返ると、トランペットを持った麗奈が怖い顔で立っていた。

「バカなの? ねえ、バカなの?」

「いきなり何? 痛かったんだけど」

「バカなの? 久美子って、私が思ってるより遥かにバカなの?」

久美子がスマホを仕舞うと、麗奈が隣に腰かけた。

「本当に、そういうの、学校では開かないで。今後ろにいたのが加藤さんとかだったら、どうするつもりだったの?」

「ごめん」

麗奈が思いの外本気で怒っているとわかったので、久美子は素直に反省した。

個人練習と称して、二人でサボっている。サボると言っても、滝が来る以前の先輩たちのように、トランプをして遊ぶようなレベルではないが、ストイックに練習に励んでいた麗奈と、基本的には真面目な久美子にしては、だらけていた。

あれから2週間が過ぎた。

部内の空気は、香織がソロを担当することで良くなったかということ、そうでもない。

香織は上手だ。しかし、誰が聴いても麗奈の方が優れていた。滝は公平だったが、やはり麗奈と比較してしまうところもあるのか、指摘が以前より厳しくなった。

それに便乗するように、周囲から「香織で大丈夫なのか」という声が上がりに始めた。中には直接麗奈に、やっぱりソロをやってくれと言ってきた強者もいたが、麗奈はいつも通り冷淡に突っぱねた。

香織は文句一つ言わずに頑張っているし、確実に上達している。しかし、比較の対象はチートスキルの持ち主なので、その差は数日の努力で埋められるものではない。

「どっちみち文句を言われるなら、やっぱり私がソロを吹けば良かった。まったく。久美子のせいだ！」

眉間に皺を寄せて、麗奈が吐き捨てる。結構根に持つてるなああと、久美子は呆れた。

麗奈への風当たりも強い。香織が非難されることで、麗奈がソロを降りた理由を、香織への嫌がらせだと捉える者が現れた。むしろ今ではその説が主流になっていて、結果的に麗奈は「本当に性格の悪い一年生」という烙印を押されている。

「麗奈は強いね。私なら堪えられない」

元気付けるようにそう言ってみたが、麗奈は何も答えなかった。

しばらく陽射しと風を楽しむように黙っていると、近くでざりつと砂を踏む音がした。

顔を上げると、渦中のマドンナが立っていて、その後ろには優子が落ち込んだ顔で項垂れていた。

香織は硬い表情をしていたが、無理に微笑んだ。それが痛ましくて、久美子は思わず目を逸らす。

「少し、いい?」

「はい」

麗奈が無表情で頷いた。返事も事務的で、すっかりいつもの冷淡な麗奈になっている。

一度「冷奈」に改名したらどうかと言ったら、5分くらいすぐぐられて、人生で初めて死を覚悟する事態に陥った。

自分の前でだけ見せる笑顔や感情。嬉しい反面、もっとみんなに本当の麗奈を知ってほしい気もする。

そんなことをぼんやり考えていた久美子の耳朵を、香織の悲愴な声が打った。

「ソロを、やっぱり貴女が吹いてください」

ピリツとした緊張が走った。香織は今にも泣きそうな目をしているし、優子は絶望的な顔でそんな香織の背中を見つめている。

突然の修羅場に、しかし麗奈はまったく動じることなく口を開いた。

「どうしてですか?」

「貴女の方が上手だから」

「必ずしも、一番上手な人間がソロを吹く必要はないと思います」

香織よりも麗奈の方が上手い。それはもう明白なので、生意気ではあるが、いちいち謙遜したりしない。

「本当の理由はなんですか?」

静かに促す。香織は少し逡巡してから、情けなく笑った。

「私、もう堪えられない。みんな、私より麗奈ちゃんの方がいいと思ってる。みんな陰口言ってる。前までこんなことなかったのに」

香織は誰からも好かれる人気者だった。優子に限らず、彼女を好きな部員は多かったし、嫌っている者はなかった。

だから、嫌われることに耐性が無いのだ。久美子は冷静にそんなこ

とを思った。

「みんなって誰ですか？ 私も久美子もそんなこと思っていないし、優子先輩だってそうですね？ 声の大きい一部のバカのために、今日までの努力を全部捨てるんですか？」

相変わらず淡々とした声だったが、麗奈が久美子以外の誰かを励ますのは珍しい。不器用な台詞だったが、麗奈の言わんとすることは伝わったようで、香織も驚いた顔をした。

柔らかく微笑んで、吐息を漏らす。

「麗奈ちゃんは強いね」

「強くありません」

即答する。それから腰を上げて、香織と向かい合って立った。形の良い薄い唇が言葉を紡ぐ。

「応援してくれる人がいるから、私は頑張れる。ただそれだけです。落ち込んでる時は、視野が狭くなるものです。顔を上げて周りを見てください。どんな時でも香織先輩を応援してくれる人、いますよね？」

香織は目を丸くして、少しの間、呼吸をするのも忘れたように固まった。それから壊れたオモチャのようにゆっくりと振り返る。

やはり呆然としている優子と目が合った。優子は状況を飲み込めないように立ち尽くしていたが、すぎるような香織を見て大きく頷いた。

久美子は怪訝な目で麗奈を見上げる。麗奈はそんな久美子に構わず、一步香織に近付くと、今日は随分力なく映る細い肩を抱きしめた。突然の抱擁に、香織が目を見開いて、すぐ隣にある麗奈の黒髪を見た。そんな香織の背中をそっと撫でて、麗奈が聴いたこともないような優しい声で言った。

「大丈夫。香織先輩は上手です。私たちも全力でバックアップします。だから、自信を持って吹いてください。香織先輩が笑顔で吹いてくれることを、私たちはみんな、心から望んでいます」

「それは、麗奈ちゃんも……？」

香織の声が震える。どうしていいのかわからないように、両手が宙

を彷徨う。

「もちろん、私もです。香織先輩が2年間、どれだけ頑張ってきたか、一年の私たちでも知っています。一緒にいい演奏をしましょう」

ぎゅっと、麗奈が強く香織を抱きしめると、香織の目から大粒の涙が溢れた。それが零れて麗奈の頬を濡らす。

置き場所を探していた香織の手が、恐る恐る麗奈の背中に触れる。それから同じように強く、麗奈の体を自分の胸に引き寄せて、香織は嗚咽を漏らした。

「うん。ありがとう、麗奈ちゃん。ありがとう。私、頑張るから」
「はい」

麗奈が穏やかに微笑む。それを見ていた優子が、感極まったように二人に抱きついて、大きな声で泣き出した。つられて香織も声を上げる。

それをベンチに座ったまま眺めながら、久美子は思った。
何か変だと。

再び静寂が訪れて、二人でベンチに座っている。
グラウンドの方に顔を向けたまま、久美子は聞いてみた。

「さっきのあれ、どこまで本心だったの？」

ちらっと目だけで横を見ると、麗奈は無表情で手元のトランペットを見下ろしていた。

「よくわからない。でも、私は久美子みたいに器用じゃないから、本心の一つだとは思う」

「そっか」

久美子は、誰よりも麗奈のことを知っている。麗奈の親以上に、麗奈のことをわかっている。そんな自負がある。

それでも、さっきの麗奈は見たことがなかった。麗奈があんなふうに香織を抱きしめて、あんなふうに優しい言葉をかけるなど、考えもしなかった。

だから、全部嘘だと思った。

「久美子って、本当に冷めてるよね。でも、そういうところ、好きよ。あの時からずっと」

久美子の言いたいことを察して、麗奈が笑った。

あの時というのは、もちろん中3のコンクールのことである。悔しくて泣いていた麗奈に、実に淡々とあの一言を吐いた。

元々麗奈の方が感情豊かである。ただ、人情があるとは思っていなかった。考えてみれば、いつだって一歩引いたところから冷静に眺めているのは自分だ。

「優子先輩も嬉しそうだったね。麗奈、優子先輩のこと、嫌いじゃないの？」

「どうでもいいかな。でも、私もし久美子を傷付けられたら、きつとそいつを殴るよ」

自分はどうかろう。久美子は思う。

麗奈のことは大好きだ。愛している。それでも、いざという時、麗奈のために頑張れるだろうか。

「いつもありがとう。私、頼りなくてごめんね」

「そうね。でも、頼りない久美子の方が可愛いわ」

素直には喜べないことを言ってから、麗奈がトランペットを構えた。

「ソロのことは悔しかったけど、さっきの香織先輩を見ていたら、これで良かったって思った。音楽に優劣をつけることに、私は賛成なんだけど、それだけじゃないって思った」

少し音を出す。滑らかな指使いと、淀みないリップスラー。

「私は特別になりたかった。だから、トランペットで一番になって、特別になろうと思った。コンクールでも絶対にソロを吹きたかった。でも……」

力強い瞳。けれど以前のような刺々しきはなくて、緩めた頬には温かみがあつて、凜々しくて可愛らしい、大好きな麗奈。

「私、久美子とこうしている時間が好き。二人でのんびり、音を楽しむ音楽もいいなって思った。貴女の特別になれたら、今の私はそれでいい」

マウスピースに唇を当てる。1音目から、自信に満ちて力強く響く、格調高いメロディー。誰もが思わず足を止めて聴き入る、次元の

違うサウンド。

懐かしい。中学時代にどこかで演奏した曲だ。

ヘンデルの『水上の音楽』、第2組曲の『アラ・ホーンパイプ』。同級生に、こんなにもトランペットの上手な子がいるのかと、心が打ち震えたのを覚えている。

けれど、あの頃よりもさらに洗練されている。荒削りな勢いは鳴りを潜め、曲本来の持つ優雅さと、弾むような軽やかさが前面に押し出されている。

それはきつと、技術の進歩ではなく、麗奈の人としての成長だろう。他人と競争して勝つことにしか興味のなかった麗奈が、協調性を覚えて周りが見えるようになった。

久美子もユーフォニアムを構えた。本当はもつと楽器が欲しい曲だが、麗奈のトランペットなら大丈夫だ。

胸いっぱい、息を吸い込んだ。

高さも音色も役割も違う音が絡み合って、一つの音楽を織り成す。麗奈とのアンサンブルは、いつだって気持ちがいい。

低音で麗奈の響きをしっかり支えている満足感。技術は劣るが、楽しそうな麗奈の顔を見れば、そんなことはどうだっていい。

ユーフォニアムは地味な楽器だ。愛着もなく吹いていた時代もあったが、この控えめな存在感が、久美子には合う。

もしトランペットと音のぶつかる楽器をやっていたら、今の麗奈との関係はなかったかもしれない。

時々麗奈と目を合わせながら、一つの音楽を作り上げる。二人でのんびり、音を楽しむ。こんな日常も悪くない。

伸びやかな麗奈の音が、大空に舞い上がる。

その音楽のように、異なる二人が作り上げていく、美しい毎日。

— 完 —